
バカとテストと召喚獣 Fクラスの優等生

十六夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣 Fクラスの優等生

【Nコード】

N7893R

【作者名】

十六夜

【あらすじ】

文月学園でFクラスに入った主人公柊真人が幼馴染や雄二や明久とバカ騒ぎする物語です

プロローグ（前書き）

修正加えました

プロローグ

「……ん、足音……朝か……」
寝癖をつけまくった黒髪の少年が起き上がる

+ + + +

P M 6 : 0 0

「……朝……」

1人の少女が目を覚ました
綺麗な黒髪でショートそめいろ しおんのその少女の名前は染色 紫苑

彼女は起きると早速家事を一式済ませ

自分の身支度を済ませて玄関へ行く

彼女は1人暮らしである

彼女は文月学園に入学する為に遠くからこの町に引っ越してきたのである

そして彼女と同じように1人暮らしの少年がいる

学校に行くには速い時間帯に彼女は家を出て

近くにあるその少年の家へ行く

カチャ

静かに扉を開け、階段を上り寝室へ向かう

そして扉に手をかけてドアを開けようとしたその時

あつちから扉が開いた

「おはよう……」

いま扉を開け大欠伸をしながら伸びをしている少年の名前は柊 真人^{ひいらぎ まさと}
紫苑の幼馴染でこの物語の主人公である

「おはようさん。起きるの早いね」

紫苑が驚いたように真人に言う

「ああ。足音が聞こえたから・・・」

真人は当たり前のように返事をする

「足音って・・・全くあんさんちゆう人は・・・どんやけ耳がええねん」

紫苑はあきれたようにいい

「ああ、子供の時から教えられてたからな、そして・・・」

真人は自慢げに昔のことを語りだす

「昔話はどないやてええ、そないなことよりも今日から学校やで、準備はしたんか？」

「・・・忘れてた・・・」

「そないな事やと思うたわ。うちが朝食をつくるさかい、マサは準備をしておくれやす」

「分かった。すまんね」

真人は急いでバックを用意しそこに勉強道具を詰める

紫苑もキツチンへ向かう

真人の準備が終わり、朝食を食べ終わると時間的にまだ余裕があったので

真人はパソコンを開きゲームを開始した

そして真人がゲームを終わり時計を見ると時間的にぎりぎりだった
「急ぐぞー!!」

二人は急ぎ足で文月学園に向かった

途中の全力疾走が効いて紫苑の体力はほぼゼロになり紫苑は歩き出す
「コレは完全に遅刻だな・・・まあ気にすることではないか・・・」

紫苑大丈夫か？」

「え？・・・げ、限界・・・」

女子って体力ないんだなと思いながら真人は聞く

「いや体力じゃない。遅刻することについてだ」

「ち、遅刻・・・あかんに決まっとるでしょ・・・」

「そうか・・・だったら仕方がない走るか・・・」

真人は疲れきった紫苑の腕をとる

手をつないで走るその姿はさながら恋人同士の様であった・・・

ようやく玄関につく

「遅いぞ、柊、染色」

すると玄関の前で呼び止められた

声のする方向には浅黒い肌をしたごついおっさんが立っていた

「おはようございます。鉄人の西村先生？」

「おはようさん。西村先生」

おっさんの正体は生活指導の西村教諭だ

鉄人というのはトライアスロンが趣味の彼のあだ名だ

ちなみに彼が真冬でも半袖でいるのも理由の1つ

「疑問系で聞くな！」

「いやいや、疑問系は聞くものですよ」

「まあそんなことはどうでもいい

お前ら『普通におはようございます』じゃないだろう」

「あ、すいません。今日も寒そうですね」

「そうだな・・・今日は寒いな・・・しかしそういうことではないんだ

遅刻の謝罪だろ」

「そつちでしたか。すいません」

「すんまへんどした」

二人で謝罪をすると

「うむ、ほら。受け取れ」

先生は箱から封筒を二つ取り出し二人に渡す

「うち今回は自信あるんで、かなってええクラスのはずやで」

「俺も今回は頑張ったからな。結果に期待する」

封筒を受け取ると紫苑はきれいに封筒をちぎる

「染色・・・お前のテストの点数は良かった。Aクラス級だった。だっただが・・・」

テストにはコレを書かなきゃゼロ点というものがある。」

紫苑のテンションは段々と下がっていく

「・・・こらほんまどすか・・・」

「どれだけいい点を取ろうと・・・そう名前を書いてないとゼロ点になるんだ

次は気をつけろよ・・・」

『染色紫苑・・・・・・Fクラス』

なぜ紫苑が落ち込んでいるかというと

紫苑達に通っている文月学園はクラスがAからFまであり、

二年生以上は振り分け試験の成績順でクラスが決まる

頭がいい人からA、B、Cといった順番である

要するにFクラスというのはこの文月学園の中で最底辺のクラスということになる

なので誰もが避けたいと思っているクラスなのである

「柊、今だから言うがな・・・」

「はい、なんですか」

真人は中々開かない封筒を開けようと試行錯誤している

「俺はお前を去年一年見て『もしかすると、柊はすごい大事なところでミスをするんじゃないか?』なんて疑いを抱いていたんだ」

「それは大きな間違いですね。僕はやるときはやる男ですよ」

「ああ振り分け試験の結果を見て、先生は自分の間違いに気付いたよ」

「そういつてもらえると嬉しいです」

ようやく開けることができた封筒から真人は一枚の紙を取り出す
「喜べ、柊。お前への疑いは晴れた」

折り畳まれた紙を開き、書かれているクラスを確認する
丁度シヨックから立ち直った紫苑がそれを覗き込む

「そんな・・・俺のテストの点数は鬼門の英語も勉強したからAクラス並のはず」

「ああお前のテストの答えはすごかった。Aクラス級だったよ
しかしな、お前はすごい大事なところでミスをした・・・

・・・そう、名前だ。お前が英語を熱心に勉強したということはよく分かったよ

答案の名前記入欄に英語で名前を書いているのだから
しかもスペルを間違えて・・・」

「・・・どんまい・・・」

『柊真人・・・・・・Fクラス』

プロローグ（後書き）

京都弁って難しい…

第一問

問題

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。このときの問題とマグネシウムの代わりに用いるべき合金の例を1つあげなさい』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると、激しく酸素と反応するため危険であるという点』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので鉄ではダメと言うひっかけ問題なのですが、姫路さんは引っかけありませんでしたね。

柊真人の答え

『問題点……合金を使おうとする事。鉄でいいと思う合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

そんな事をいっただら問題になりません
しかもちゃんと合金の例を答えられるのならばその問題点もちゃんと書いてください

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払ってなかった事』

教師のコメント

そこは問題じゃありません

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）

教師のコメント

すごく強いと言われても

Fクラスの教室に向かう途中にAクラスの教室はあった

Aクラスは通常のクラスの5倍はあろうというその大きさだけでも目を引くのにその中の設備はもつとすごかった

「パソコンにエアコン、冷蔵庫まであるのか……」

「うわ……すごい……なんあれ、普通やったら黒板がある所に半端ではおまへん大きさのプラズマディスプレイがあるやないか」

そういつて紫苑はAクラスの前方を指差した

そこには壁全体を覆うほどの大きさのプラズマディスプレイがあった
そこにAクラスの担任の名前が表示される

「……まずは設備の確認をします。」

二人はAクラスから聞こえる声に耳を澄ます

「ノートパソコン、個人エアコン、冷蔵庫、リクライニングシート
その他の設備に不備のある方はいますか？」

参考書や教科書などの学習資料はもとより、冷蔵庫の中身に関しても全て学園が支給致します。他にも必要なものがあれば遠慮することなく何でも申し込んでください」

「これがAクラスか……」

「すごいクラスやね……」

なんという好待遇。これが学年最高のクラスか……名前さえちゃんと書いていれば自分たちもこのクラスに入れたのに……二人は自分たちがした些細なミスを今更ながらに酷く後悔した

「過ぎたことを言っても仕方がないか……おつとこんなところで時間を売っている場合じゃなかったんだ……おい、紫苑。行くぞ」

紫苑より一足早くショックから立ち直った真人が思い出したように言う

「うん、そうやね」

紫苑もショックから立ち直り二人でFクラスへ向かう

「まさか……ここが……教室なのか？」

「間違おらんやろ。プレートに2・Fと書いてあるのそやし」

「そうか……ここが俺達の教室か……これが格差と言うものか……」

「まあ、入れへんと始まらいでしょ」

そう言いながら紫苑は如何にも建てつけが悪そうな教室の戸を開ける

「遅いぞ、蛆虫やろ…」

教壇に立っていた野性味溢れる少年は紫苑の顔を見て言おうとしていた言葉を止めた

「へー？言うてくれますね」

「ああ、大層な挨拶だね」

「柊とその腰巾着だったか。すまん明久と間違えた」

「誰が、腰巾着やてえ？」

「お前らいつも一緒だからな。違うのか？」

「それやったら…他に言い方がおますんやないか…」

「ん？だったら何がいいんだ？……………ああなるほど…そういう」とか

「俺の女にちよっかいを出さんでくれ。雄二」

「ちよい何を言い出すんや」

紫苑の顔がみるみる赤くなる

しかし二人はそれを気にせず話す

「そうか、それはすまなかったな

ところでなんでお前たち二人がこの教室にくるんだ？お前たちの実力はAクラス級だろ」

彼の名前は坂本雄二。真人と紫苑とは去年クラスがいつしよだったので交友はある

「えーと…それは…」

「これには深い訳があるんどす…」

雄二の質問に対して言葉に詰まる二人
…名前を書き忘れていたのと書き間違えたなんて恥ずかしくて言えるわけがなかった

「そういえば今年の振り分け試験で名前を書き忘れた奴と名前を英語書いてスペルを間違えた奴がいたらしいな。まあ誰かとは言わないが…」

雄二はにやりと笑って二人の方を向く

雄二の言葉に動揺を隠せない二人

「そ、そんな事より雄二は何してるんだ？」

「ん？ああこれは、先生が遅れてるらしいから、代わりにな…」

「代わり…？ってことは雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、一応このクラスの最高成績者だ」

「ところで俺等の席はどこだ？」

「あゝ、それなら席は決まっていらないから二人とも適当に座っておいてくれ」

そう言われて俺達は後ろの方の床に座る

——そう、床に座る

なぜならこのクラスにはイスがないからだ

真人と紫苑が席（？）に座ると同時に教室の戸が勢いよく開いた

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ」

「早く座れ、ウジ虫野郎」

愛嬌たっぷりの男子生徒の言葉は雄二に阻まれた

「聞こえないのか？ああ？」

男子生徒に追い打ちをかける雄二

「…雄二何やってんの？」

すると男子生徒は雄二に向かって親しげに話しかける

彼こそが学園一の問題児として有名な吉井明久

予測不可能な行動とその頭の悪さから鉄人に目を付けられており
バカの代名詞である”観察処分者”の称号も持っている
真人の親友である

「えーと、ちょっと通らせてもらえますかね？」

明久達の後ろから初老の冴えない男性教師が入ってきた

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

明久と雄二はそれぞれ返事をして席に着く

「えー、おはようございます。二年F組担任の…福原慎です。よろしく願います」

福原先生は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた

「この教室にはチヨークすらないのか…」

真人がうんざりしたように呟いた

「皆さん全員に、卓袱台と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出てください」

机と椅子がなく畳に卓袱台と座布団の時点でおかしいのだが不備と言う言葉に全員がありまくりと反応した

「せんせー、俺の座布団、綿がほとんど入ってないですー」

「あーはい、我慢してください」

「先生、俺の卓袱台、足が折れてます」

「木工用ボンドが支給されますので自分で直してください」

「センセ、窓が割れてて風が寒いんですけど…」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう」

教室の隅には蜘蛛の巣が我が物顔で形成されており、壁はひび割れや落書きだらけでお世辞にもいい教室とは言えなかった

「必要なものがあつたら、極力自分で調達するようにしてください」
「これがFクラスか……」

先程Aクラスの教室を見た真人は設備の差に嘆いたように言った

「では、自己紹介を始めましょうか。そうですね、廊下側の人からお願いします」

廊下側の生徒のひとりが立ち上がり、名前を告げる

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

男子の制服を着た女子がそう言う

——しかし去年同じクラスにいた真人達は知っていた

その生徒が女子ではなく男子であることに

しかしその顔は何度見ても女子にしか見えない

特に男だらけな教室では一際目立っていた

「——と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

「……土屋康太」

彼はムツツリーニこと、土屋康太

異名であるムツツリーニの名前が有名すぎて本名が知られていない

彼自身目立つことを好まない性格なのでそれも重なっている

彼も去年の真人達のクラスメイトである

「島田美波です。海外育ちで、日本語は会話はできるけど、読み書きは苦手です。あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので趣味は……」

Fクラスでは女子が少ないので注目が集まる

「吉井明久を殴ることです」

美波は明久の方に手を振っている

彼女も去年の真人達のクラスメイトだ

美波の自己紹介が終わりその後は淡々と自分の名前だけを告げるだけの作業が進んでいく

「柊真人です。趣味はゲームと動画鑑賞（アニメ）と剣術、剣道、居合道、刀を見る事です。あと染色紫苑とは幼馴染です」

「そない情報はいれへんと思うんどすけど」

『幼馴染だど！！？』

Fクラスの面々が自分の上履きを脱ぎ、手に持ち真人に対して構える対して真人は幼馴染程度の関係にしては大げさすぎだと思いながらシオルダーバックから木刀を取り出す
奥には真剣が見え隠れしている

「刀が好きすぎていつも携帯してます。たまに真剣を携帯していることもあるのでお気をつけて。それでも実戦経験は豊富なので皆さんよろしくお願いします」

「けったいなことをしゃべるんではおまへんの」

いきなり木刀（真剣も）を見せられては流石に攻撃は出来ないと考え全員が攻撃をやめた

この件がきっかけで真人が危険人物として見られるようになったのはまた別の話である

「染色紫苑ていいいます。趣味は家事全般。さきほどマサが言った通りマサとは幼馴染やから

みなはんこれから一年よろしうお願いします」

次は明久が自己紹介する番になった

彼は出だしが肝心だと言う事で気さくで明るい好青年であることをアピールする為に軽いジョークを織り交ぜて自己紹介をすることを決定した

彼は軽く咳払いをし、笑顔でこう言った

「えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『ダアアーリーーン!!』

野太い男の声の大合唱

原因の明久は笑顔を引きつらせる。真人は苦笑いをし、紫苑と真人は苦笑いをする

「……失礼、忘れてください。とにかく、よろしくお願いします」

「なんとも気持ち悪い大合唱だ……」

「マサ、どんどん本音が出て来てるよ……」

「取り繕うのが面倒臭くなってきた……」

ガラ！

「あの、遅れて、すいま、せん……」

「えっ？」

いきなり、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れたその姿に、教室中から驚いた声が上がる

「ちょうど好かったです。今自己紹介をしているところなので、姫路さんお願いします」

「は、はい！ あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします……」

小柄な体を縮み込ませるようにして声を上げる

肌は新雪のように白く、背中まで届く柔らかかそうな髪は保護役をかきたてるようだ。

「はいっ、質問です！」

「あ、はいっ。なんですか？」

登校するなり、質問がいきなり自分に向けられて瑞希は驚く

「何でここにいるんですか？」

一見無礼にも見える質問だが、質問の内容は的を得ている。なぜなら…

彼女は容姿も人目を引くが、それだけでなくテストでは1ケタの順位に必ず名を連ねている学力の持ち主だからだ
当然こんな場所に来るべき人間ではなく、Aクラスに入っている物と誰もが思うはずである

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…
…」

その言葉を聴きクラスの全員がなるほどと頷く
そして若干二名は仲間がいたことに喜びに近いものを抱いていた
AからFまでのクラス分けは、学年末に行われる振り分け試験で決まる

この試験での途中退席は0点扱いにされるのである

そんな瑞希の言葉を聴きクラスの中で良い訳が飛び交う

「そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ、化学だろ？ あれは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて」

「黙れ1人っ子」

「前の番、彼女が寝かせてくれなくて」

「今年一番の大嘘をありがとう」

その様子を見ていた真人は一言

「これは想像以上にバカだらけだ……」

「確かにこの中では取り繕っても意味があらへんね……」

紫苑も同情したように言う

「で、ではっ、今年1年よろしく願います！」

瑞希は逃げるようにして明久と雄二の隣の空いている卓袱台に着いた席に着くや否や、安堵の域をついて卓袱台に突っ伏す瑞希

そこで雄二と明久と瑞希、3人で話すのを横目で見ながら真人はあ
ることに気づいた

「なるほど…姫路は…明久のことが…」

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

パンパン、と教卓を叩いて先生が明久たちを注意する

バキィッ パラパラ

本人軽く叩いただけだろう

しかし先生の前で教卓は単なるゴミになっていく

「えっ……替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうにそう告げると、先生は早足に教室から出て行った
全員が改めてこのクラスの酷さを思い知る

「雄二、ちよつといい？」

「ん？なんだ」

明久と雄二が廊下に出る

真人は二人が出ていった廊下へ目を向け、立ち上がる

紫苑がそれに反応する

「どないしたんや？もそやけどもてあれにまざる気どすか？」

「ああ、ちよつとね」

そう言つて真人は廊下に出る

「……姫路の為、か？」

「どうしてそれを！？」

「べつ別にそんなわけじゃ！」

「気にするな、俺もAクラス相手に試召戦争をやるうと思つていた
所だ。世の中学力がすべてじゃないつて、そんな証明がしてみた
くてな……」

「ふむ、それで？」

「ああ、Aクラスに勝つ作戦も思いついたし……って柊お前何時の間に
いたんだ？」

二人は先程から真人が後ろにいるのに気が付かずだった

これは二人が集中していて周りに気を使っていなかったわけではなく
ただ単に真人の影が薄いからである

「面白そうじゃないか。俺も参加させてよ」

「いいのか？ 柊、俺達とつるむとお前まで悪く見られるぞ」

「大丈夫だよ。ＦクラスになりＦクラスの馬鹿な奴らを見ると少しだけ取り繕ってる自分が馬鹿に見えてきた。だから俺の評判に少しぐらいの傷がつくぐらいなら問題ない」

「真人は優等生という肩書があつたのに本当に大丈夫なの？」

「大丈夫だよ、明久。俺の優等生としてのレッテルはＦクラス入りにより壊れた」

「そうかい… なら大丈夫だな… っと先生が戻ってきた。教室に入るぞ」

「あ、うん」

「雄二、任せたぞ」

「ああ、任せておけ」

壊れた教卓を替えて、気を取り直して自己紹介を再開する

「坂本君、キミが自己紹介最後のひとりですよ」

「了解」

先生に言われて雄二が席を立つ

そしてゆっくりと教壇に上がり、真人らの方に向き直った

「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも好きに呼んでくれ」

「さて、皆に一つ聞きたい」

雄二はゆつくりと、全員の目を見る様に告げる

全員の様子を確認した後、雄二の視線は教室内の各所に移り出す

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられてFクラスの生徒も雄二の視線を追う

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

一呼吸おき、静かに告げる

「不満はないか？」

『大アリじゃあっ！！！！！』

教室を揺るがす、2年F組の魂の叫び

「だろう？ 俺だって不満だ。代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二が意見に同意すると、あちこちから不満の声が上がった

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費だろ？ あまりに差が大きすぎる！』

『そうだ、おかしいぞ』

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは俺の代表としての提案だが——」

級友の意見に満足したのか、自信たっぷり、野生味満点笑顔で八重歯を見せ、言い放つ

「——Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた

第二問

問題

以下の意味を持つことわざを答えなさい

- (1) 得意な事でも失敗してしまう事
- (2) 悪い事があつたうえに、更に悪い事が起きる喩え

姫路瑞希の答え

- (1) 弘法も筆の誤り
- (2) 泣きつ面に蜂

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら“河童の川流れ”、“猿も木から落ちる”、(2)なら“踏んだり蹴ったり”や“弱り目に祟り目”などがありますね

柊真人の答え

- (1) サルも木から落ちる
- (2) 踏んだりけつたり

教師のコメント

正解です。別に問題は無かったですね

吉井明久の答え

- (2) 泣きつ面蹴つたり

教師のコメント

君たちは鬼ですか

土屋康太の答え

(1) 弘法の川流れ

教師のコメント

シユールな光景ですね

坂本雄二が言ったAクラスへの宣戦布告

『勝てるわけがない』

『これ以上設備を落とさるなんて嫌だ』

『姫路さんがいたら何もいらぬ』

それに対して教室中から悲鳴が聞こえる

文月学園のテストは一時間という時間の間に何問問題を解いても言
いと言う問題数無制限のテストである

その為、才能があるものは何処までも天をとることができ性能があ
るものと才能がないものの差が大きく出る。だから学年最低のFク
ラスと学年最高のAクラスの点数には三倍近い差がある。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

しかし雄二はそんなことは知っていながらも、そう宣言した雄二の発言に対し否定的な意見が教室を支配する
その中で雄二のみは自信を持っている

「根拠ならあるあるさ。このクラスには試召戦争で勝つ事のできる要素がそろっている。それを今から説明してやる」

そう言った雄二はとある箇所視線を送る

「おい、康太。いつまでも姫路のスカートの中をのぞいてないで、前に出てこい」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ！」

必死に顔と手を振って否定のポーズを取る少年

恥も外聞もなく低い姿勢から覗き込むその姿は否定など無意味だといふのに

少年は畳みの跡を隠しながら壇上に立つ

「紹介しよう。こいつがあ有名なムツツリー二だ」

「……………！！（ブンブン）」

土屋康太という名前は其処まで有名ではない

しかしムツツリー二と言う名は有名だ

男子生徒からは畏怖と畏敬を女子生徒からは軽蔑もって挙げられる

『バカな、奴がそつだと言うのか？』

『だが見る、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？』

『ああ、ムツツリの名に恥じない姿だ』

クラス中がざわめく中、只一人、姫路だけは疑問符を浮べていた

「姫路のことは説明する必要もないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

「えっ？わ、私ですかっ！？」

「ああ、主戦力だ。期待している」

彼女の成績のことを考えればもつともなことである

『そつだ、俺達には姫路さんが居るんだつた』

『彼女なら、Aクラスにも引けを取らない』

『ああ。彼女が居れば何もいらなないな』

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。成績はそこまで優秀ではないが演劇部のホープだとか、双子の姉のことなどで有名である

『おお……！』

『ああ。アイツ確か、木下優子の』

「さらに柊真人に染色紫苑もだっている」

「……俺か……」

真人が退屈そうに反応する

「二人とも実力はAクラス級だ。振り分け試験のときはバカやってFクラスに入ったらしい」

雄二の言葉に対し顔色を悪くする真人と紫苑

『柊といえば単教科で学年1位をとったこともあるあの柊か』

『紫苑は学年でもかなりの上位にいた人だな』

『しかし柊なんてこのクラスにいたのか気付かなかったぞ』

真人の影の薄さは全開である

「戦ってくれるよな柊、染色」

「大丈夫やで、任せてーな」

「・・・まあ教科によれば・・・」

元気に返事する紫苑と変わって暗く返事をする真人

雄二はその理由を知っており

「大丈夫だ、ここのクラスの奴は全員馬鹿だからお前の点数を見たところでどうとも言わんだろう。それに英語のフィールドでは極力戦わせないようにしてやる」

「そうか・・・それなら大丈夫だ」

真人が安心したように返事をする

しかし疑問になった明久が一言

「なんで真人を英語のフィールドで戦わせたらだめなの？」

「分からないのか？仕方がない、おい真人この単語を読んでみる」

そういつて雄二は呆れたように明久の質問に返答すると

黒板に英単語を書き出した

「・・・・・・・・・・・・・・・・日本人に英語は必要ないだろう」

真人は苦し紛れにそう答える

「こういうことだ。コイツは英語だけでんでダメなんだ」

「英語なんてできなくても暮らしていける」

真人は半分はぶてたように答える

「それでもコイツの実力はAクラス級だ、得意科目では姫路を越える」

これだけ英語がダメでもAクラス級の実力をもっている真人に一同は期待を乗せる

「当然俺も全力を尽くす」

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』

『それじゃ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが四人もいるってことだよな！』

気がつけば、クラスの士気は確実に上がっていた。

「それに、吉井明久だっている」

・・・・・・・・シン――

そして一気に下がる

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

吉井が文句を言い出す

『誰だよ吉井明久って』

『聞いた事ないぞ』

「ホラ！せっかく上がりかけてた土気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちと違って普通のにんげんなんだから、普通の扱いを——
ってなんで僕を睨むの？土気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」

「そうか。知らないのなら教えてやるこいつの肩書きは”観察処分者”だ」

『………それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かが核心を言う

「ち、違つよっ！ちょっとお茶目な十六歳につけられる愛称で」

「そっだ。バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

”観察処分者” 学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられるもので、吉井明久がこの学園で唯一の観察処分者である

「まあそんないてもいなくても変わらないような雑魚は置いておいて………」

「だったらなんで紹介したの!？」

明久の言葉を見殺して雄二は続きを話す

「とにかくだ！俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服したい。」

明久の言葉をとことん無視する雄二だが
明久と雄二、この二人は親友なのである

「皆、この境遇は大いに不満だろう！？」

『当然だ！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーっ！！』

「俺たちに必要なのは、卓袱台ではない！Aクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーっ！！』

「お、おー……」

雰囲気を押され、瑞希も小さく拳をふりあげる

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

「奴らがお前に危害を加えることはない。俺を信じる。俺は友人を騙す事はしない。だまされたと思って行ってみろ」

「わかったよ、それなら使者は僕がやる」

クラスメイトの歓声と拍手に送られ明久は毅然とした態度で教室を出て行った

雄二の嘘に騙されて……

「あんなバカだから、使いやすい」

そんな雄二の言葉を聞いた真人は心配になり明久を追うことに

+ + + +

「騙された!」

しばらくして明久が教室に転がり込んできた

その姿はボロボロでDクラスで何をされたかが容易に理解できるほどだった

そんな明久に雄二は

「やはりそう来たか」

平然と言い切った

「やはりつてなんだよ!やっぱり使者への暴行は予想通りだったんじゃないか!」

「当然だ。そんな事も予想できないで代表が務まるか」

「少しは悪びれるよ!」

「まあ落ち着いたらどうだ。命はあつたんだし」

そこへ真人が割って入って明久を諫めた

「大丈夫だったか?」

「ああ、問題ない。なんたって俺は優等生だからな気付かれもしなかった……」

「そうか、それは残念だったな」

自分で言っていることに落ち込んでいる真人

「吉井君大丈夫ですか？」

心配した瑞希が明久に駆け寄る

「あ、うん大丈夫。殆どかすり傷だから」

強がってそう答える明久

「吉井、ほんとに大丈夫？」

「平気だよ、心配してくれてありがとう」

「よかった・・・ウチが殴る余地はまだあるんだ・・・」

「ああっ！もうダメ、死にそう！！」

冗談とは言っても、真人はその美波の言葉に戦慄した

「そんな事より、今からミーティング行っぞ」

雄二の言葉に従い主要メンバーは屋上へ向かう

屋上にて

「明久、宣戦布告はしてきたな」

「うん、一応今日の午後からって伝えておいたよ」

「それなら先にお昼ご飯ってことね」

「そうだな、明久今日くらいはまともな飯を食えよ？」

「そう思っなら、パンでもおごってくれと嬉しいんだけど」

「え？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

「いや、一応食べてるよ」

「水と塩を食べるというとは、明久はすごいな。それじゃ体壊すぞ」
「そんなに食べる物がなければコレぐらいなら……………」

真人と紫苑はもっていた飴とおかずを明久にあげる

明久は1人暮らしで親の仕送りを頼りに暮らしているが、その仕送りを趣味に使っている

そのため食べるものがないのだ

「……………あの、良かったら私がお弁当を作ってくださいようか？」

「え？本当にいいの？」

「はい。明日のお昼でよければ」

「良かったじゃないか明久。すぐくうらやましいぞ」

「うん！……………あと真人には染色さんがいるじゃないか」

「ふーん。瑞希って、ずいぶん優しいんだね。吉井だけに作ってくるなんて」

「あ、いえ！皆さんにも……………」

「俺たちにも？いいのか？」

「はい、嫌じゃなかったら」

「僕はすまないけど、遠慮しておくよ」

喜んで全員が、と思いきや真人が断る

「ごめん、別に嫌とかではなくてちょっとお家柄だね」
「そうだったな」

この中では紫苑を抜いて唯一理由を知っている雄二が納得したよう

に言う

しかしそんな真人の発言にも嫌そうな顔をせず
真人を抜いた7人分も弁当を作るとなると大変なのに、嫌な顔1つ
しない姫路

そんな彼女に明久は再度関心の視線を向けていた

「それじゃあ話を戻すぞ」

「雄二、気になっていたんじやが、なぜDクラスなんじや？」

秀吉の疑問も最もである
なぜなら、段階を踏んでいくならばEクラスが妥当である。目標も
DではなくAクラス

「まあいろいろ理由はあるんだがEクラスを攻めない理由は簡単だ。
戦うまでもない相手だからだ」

「え？でもクラスは上だよ？」

「バカか、周りを見てみる。姫路に柊、染色というAクラス級の戦
士が居る今、Eクラスならば正攻法でも勝てる」

「じゃあDクラスは難しいって言うの？」

「確実に勝てるとはいえないな。しかし初陣だから派手に言って景
気付けたいし打倒Aクラスのために必要なことだしな」

「なるほど、これは打倒Aクラスの為の下準備ということか」

「でも負けたら意味がないよ？」

「大丈夫だ。お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。ここにいる
メンバーは最強だ」

雄二の自信満々の発言に、全員が頷いた

そして真人は己の作戦を成功させる為に立ち上がる

「それじゃあ、いつちよやりますか」

「そやね、早うこの設備とおさらばしたいわ」

「期待してるぞ、二人とも」

「任せとけ（て）！！」

DクラスとFクラスの試験召喚大会が、今始まる

第二問（後書き）

原作通りに行くか

オリジナルストーリーで行こうか
迷ってます

もしこっちがいいっていう意見がある人は感想お願いします

第三問

問題

以下の英文を訳しなさい

『 This is the bookshelf that my
grandmother had used regularly .
』

姫路瑞希の答え

『これは私の祖母が愛用していた本棚です』

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

柊真人の答え

『これは私の祖母が使っていた本ナント力です』

教師のコメント

文法が分かっているなら、単語を覚えてください

土屋康太の答え

『これは』

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか

吉井明久の答え

『 ● ♪ * — — 』

教師のコメント

出来れば地球上の言語で

真人side

Fクラス対Dクラス

俺と染色、姫路の三人は戦線には出ず、ひたすら回復試験を受けていた

振り分け試験の結果が全科目0点になっているので戦力になれないからだ

雄二が期待を込めて一言

「お前達はこれからのFクラスに無くてはならない存在だ。お前達の点数次第でこのクラスの結果は変わってくる。できるだけ高い点数を取るんだ」

「了解、でも期待はするなよ」

「は、はい。頑張ります」

俺が返事をする横で紫苑は本気モードに入っていた

「これじゃあ、話は通じないな……………」

「ん？どうした？」

雄二は疑問を持って返してくる

「紫苑はこういときは始まる結構前から本気になるんだよ。本気になるって周りなんか気にしなくなってるから何言っても無駄なんだ」

「ほう、それなら邪魔をしてみたいものだな」

「やめとけ、今邪魔すると点数に大きく影響が出るぞ」

雄二の冗談に本気でやめておけと返事をしたところで

俺も回復試験に挑むことにした

と、いつでも振り分け試験のように結果で一年が決まったりすることはないので

少しくらい手を抜いても問題は……

「柊、手を抜いたら殺すぞ」

おお、怖い怖い、鬼の代表だな、それにしても俺の考えが分かるとかこいつはエスパーか

先程伝令係の横田に送った中堅部隊への指令にも『逃げたら殺す』なんて書いてあったのだから容赦がない

「そつえば姫路さん」

俺はふと気になったことを聞こうと姫路さんの方を向く

「へ？は、はい？」

すると姫路さんは驚いたように返事をしてこっちを向くよほど集中していたんだろう。俺とは大違いだ

「姫路さんも災難でしたよね。学年最低のFクラスに落とされて」
「い、いえこのクラスもいいと思いますよ……特に……」

姫路さんに即効で否定された

そういえば姫路さんは明久のことが好きだったんだよね
ならばこの答えは妥当と言えるか

そんな事を考えていると秀吉が帰ってきた

「大丈夫か秀吉？」

帰ってきたということは戦死せずに無事だったということだろう

「守りを明久たちに預けてきた、ワシらは消耗した科目の補充じゃ」
「そうか、なら早く済ませろ、Dクラス相手にそこまで長く持つとは思えん」

雄二が言うことは最もだ

相手は点数が此方よりも上のDクラスなんだ

点数の低いFクラスが戦線を維持できている方がすごいといえるだろう

「ワシらも一、二科目補充したらすぐから、お主らは早く回復試験を終わらせるのじゃ」

そんな可愛い子（男）からそんな事を言われたら嫌でも張り切ってしまう

そんなこんなで俺も本気を出すことに

「時間稼ぎのために偽の情報を流したい。坂本、知恵を貸してくれ」

そう言いながら須川が急いで教室に入ってきた

「どういうことだ？須川、説明しろ」

「Dクラスの奴らが教師を集めようとしている。どうやら一気にけりをつけるつもりらしい」

さつきから話し声を盗み聞きする限りではDクラスの前線指揮は塚本とか言う声の大きい男子らしい

声が大きいいことはそれだけ命令も聞きやすいということだ
そのおかげでDクラスの作戦は筒抜けだがDクラスにとっては作戦がばれたところで問題がないだけの戦力差がある

そしてその大きな声で混乱がおきてもすぐ収めてしまうだろう

「なるほど・・・そういうことか・・・ふむ」

「どうするのじゃ雄二」

雄二にもいい案はないようだ

このままだとDクラスが教室になだれ込んでくるか・・・
まあその時は補充のおわっている科目で戦ってやる

そこにムツツリー二が来て雄二に耳打ちする

「・・・Dクラスは船越先生を呼ぼうとしている。立会人になってもらう為だと思う」

船越先生か・・・危険な先生だな

「船越先生かこれはいい情報を頂いた、・・・須川。ここに書いて

ある事を放送で言ってくれ」

俺はその時雄二が持っていた紙を見てその策に啞然とした

「わかった、すぐに放送室に向かう」

「Dクラスに気をつけてな」

放送・・・試験召喚戦争のために1人の少年を殺す気が・・・・・・・・

ピンポンパンポーン

『ご連絡いたします』

放送だ、この声は須川か・・・・・・・・

『船越先生、船越先生、吉井明久君が体育館裏で待っています。生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

この放送は危険すぎるだろ。船越先生とは婚期を逃し、生徒を相手に単位を盾にして交際を迫るようになった危ない先生である

この放送内容なら船越先生は絶対に体育館裏に行き、明久が来るまでいつまでも待つているだろう。船越先生を戦線に行かせたくないなら一番の策といえよう。しかしこの策の代償に明久の人生は大きく変わってしまうかもしれない

試験召喚戦争、なんて恐ろしい戦争なんだ。気を抜いたら仲間を殺されそうになるなんて

そう考えながら俺は明久に対して合掌をした

それから回復試験を続け、俺と紫苑、姫路の三人は一通りの科目の試験を終えた

「坂本君。終わりました」

「雄二、大丈夫だ」

「うちも行けるで」

「そうか、では俺たちも参戦するぞ」

「雄二、お前も出るのか？」

「本隊を連れて明久たちと合流する、そろそろやばくなってそうだからな」

「代表のお前が前線に出て大丈夫なのか？」

「問題ないだろう。お前達がいるんだから」

どうやら雄二は俺たちのことを偉く信用しているようだ

俺は頼まれたら断れないタイプなのでどうしても其処まで信用されていたら

その信用に答えたくなってくる

「そ、そうか、なら任せとけ。俺が代表の平賀を瞬殺してやる」

へまさえしなかったらDクラスの代表なんてカス同然だ

そう思いながら返答をする

それに対して姫路が疑問を述べる

「あのー、平賀君の周りには当然多数の護衛がいると思うんですけど……幾等私達でも護衛を倒してから平賀君を倒すのには時間がかかってしまうと思うんですが」

俺はここにいたって1つの疑問を浮かべる
もしかして……………

「なあ、雄二」

「どうした？ 柊」

「もしかして……Dクラスの連中は……」

聞くまでもなく雄二のその笑顔が全てを物語っていた

雄二は明久と合流する為に一足早く教室を出る

俺と紫苑、姫路の三人は下校時刻になってから下校する生徒に紛れて前線に向かう

途中Dクラスらしき生徒とすれ違っても相手は何の反応もしなかったから

どうやら本当に俺たちがFクラスに来ていることは気づかれてないようだった

平賀の後ろまで行くと、平賀と明久の会話が聞こえた

「ちくしょう！ あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに」

「何を言うかと思えば、彼氏くん。いくら防御が薄く見えてもFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

平賀の言う彼氏くんとは、船越教諭の彼氏という意味だろうなんて不憫な明久……別に俺は明久に好意があるわけではない

ただ自分に置き換えて考えるとかなりかわいそうだからこう思っているだけだ

しかし平賀はこんなにひどい奴だったのか、知らなかったなまあ喋っていることは全部正論なのだが

「それは同感、確かに僕には無理だろうね、だから――」

明久の目と俺の目が合う

「姫路さんと真人、染色さんお願いね」

「は？」

明久が言った言葉の意味を理解できていない平賀
それもそのはずDクラスは俺たちがFクラスにしていることを知らない
のだから

「あ、あの・・・・・・・・・・」

平賀の後ろから申し訳なさそうに肩をたく姫路さん
俺たち二人はそれを黙って後ろから見ている

「え？あ、姫路さんと・・・染色さん？Aクラスはこの廊下を通ら
なかったはずだけど

やはり気付いていない

・・・俺の存在にも・・・・・・・・

「俺を忘れるな！！」

「ああ、えーと・・・・・・・・誰だっけ？」

「柊だ、名前を覚えておいてくれ」

これだから影が薄い人はつらい

「ところでAクラスの人がなんのようですか？」

「いえ、そうじゃなくて・・・」

言いづらそうに体を小さくさせる姫路さんにかわって話を進める

「Fクラスになった柊真人と姫路瑞希、染色紫苑だ、よろしく。Dクラス代表平賀、Fクラス柊真人が君に現代国語勝負を申し込む。と言いたい所だが今回は点数が良くないので紫苑、頼む」

「散々かつこつけといて最後はうちかいな」
「はあ、どうも」

Fクラス 染色紫苑 現代国語 302点

VS

Dクラス 平賀源二 現代国語 129点

紫苑の召喚獣が刀で平賀の召喚獣を真つ二つにして
平賀は戦死。こうしてこの戦いの決着がついた

第三問（後書き）

回復試験ということでは

一応オリに近い話になりました

オリジナルで行くか

原作通りに行くかは

まだ悩んでおりますので意見ください

第四問

問題

以下の問いに答えなさい

(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X = 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を1つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、 $?$ $?$ の中から選びなさい

$\sin A + \cos B$ $\sin A - \cos B$ $\sin A \cos B$ $\sin A \cos B + \cos A \sin B$

姫路瑞希の答え

(1) $X = \pi / 6$

(2) $?$

教師のコメント

そうですね。角度を『 $^\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です

柊真人の答え

(1) $X = \pi / 6$

(2) $?$

教師のコメント

正解です。ケアレミスありませんし、問題ないです

土屋康太の答え

(1) X〓およそ3

教師のコメント

およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは回答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

(2) およそ？

教師のコメント

先生は今までたくさんの生徒を見てきましたが、選択問題でおよそを着ける生徒は君が初めてです。

Dクラス代表 平賀源二 討死

『うおおーっ！』

その報せを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内に響く
俺は耳がいいのでこれがかつい

『凄えよ！本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで、畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ。アレはDクラスの連中の物になるんだがらな』

『坂本雄二サマサマだな!』

『やっぱりアイツは凄い奴だったんだな!』

『坂本万歳!』

『姫路さん愛しています!』

代表の雄二を褒め称える声があちこちから聞こえる

当の雄二はがつくりとうなだれているD生徒達の奥で囲まれていた

「あー、まあ、なんだ。そう手放して褒められると、なんつーか」

雄二が照れるなんて珍しい

『坂本!握手してくれ!』

『俺も!』

完全に英雄あつかいだ。これを見るだけでこのクラスの生徒がこの設備にどれだけ不満を持っていたかがよく分かる

そんな光景を見ていると明久が雄二のほうに走ってきた

「雄二!」

「ん?明久か」

坂本が振り向く。そこへ、吉井が颯爽と駆け寄り

「僕も雄二と握手を!」

手を突き出す

「ぬおお！」

ガシッ

「雄二……！どうして握手なのに手首を押さえてるのかな……！」
「押さえるに……決まっているだろうが……！フンッ！」

普通は押さえない

そのまま雄二が手首を捻りあげると
明久の腕から包丁が落ちた

「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」
「……」

「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな間接が折れるように痛いっ！」

「今、何をしようとした」

何をしようとした？それはどう考えても……

「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首が痛いっ！」

「おい。誰かペンチを持ってきてくれ！」

「す、ストップ！僕が悪かった！」

「…チッ」

雄二はペンチでいったい何をしようとしていたんだ？

なんて考えていた時に雄二が『生爪』と呟いていたのは無視しよう

「まさか、姫路さんと染色さんがFクラスなんて……信じられん」

力無さげに近づいてくる平賀
また俺の事を忘れてやがる

「俺の事を忘れないでくれ、わざとか？」
「いや、忘れてるわけじゃないんだよ、」

苦笑いをする平賀

「あ、その、さっきはすいません」

姫路さんも駆け寄って声をかける

「謝ることはない。Fクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

まあ、ごもつともだ。やりかたは騙し討ちだが、戦争に卑怯もくそもない。そのへんは平賀もわかってるようだ

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日からで良いか？」

先程まであんなに偉そうにしていたのに、無様なもんだ
これから平賀はあの最悪の設備でクラスメイトに恨まれながら過ごさないとイケない
それは大変だろう。だが敗戦の将なのだから仕方がない

「いや、その必要はない」

は？ いったいどういう事だ？
設備が要らないと言うのか？

まあ確かに最終目標はAクラスなのだからDクラスの設備なんてい

らないだろうが

そんなこと言ってしまったのではDクラス戦の意味が無くなってしまっているのではないか？

その疑問を雄二に聞こうとしたら明久が同じような質問をして馬鹿にされていたのでやめておこう

…しかし小学生相手に『馬鹿なお兄ちゃん』と呼ばれるとは…明久も大変だな……

「いったいどういう事だ？」

平賀もわけがわからないと言った風に雄二に聞き返す

「あることをやってももらいたいんだ、それさえのんでくれたら設備は見逃してやる」

「あること？」

「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、あれを壊してもらいたいんだ」

そう言つてDクラスに移動した雄二が指差したのは窓の外にあるBクラス用の室外機

「……わかった。上手くやれば、嚴重注意だけで済みそうだ」

平賀も最低の設備で三か月間罵倒され続けるよりはマシだと考えたのか

その提案を呑んだ

鉄人に目を付けられている二人とは違いDクラスの生徒なら嚴重注意ですむだろう

平賀はその後坂本に社交辞令をいい去って行った

先程明久を見下したような発言をしても礼儀はちゃんとなって

いるようだ

「さて、皆！今日はご苦勞だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆつくりと休んでくれ！解散！」

雄二の号令を聞きFクラスのメンバーは教室に帰り、帰り支度を始めている

俺も帰り支度をする為に教室へいく

教室で帰り支度をする途中に後ろに目をやると

姫路さんの卓袱台の下にラブレターに使うような便箋があった
あれが本当にラブレターなら姫路さんは明久が好きなはずだから両想いのカップル誕生。となるわけだが

俺には関係ない話なので特に気にせず教室を出る

「じゃあな、雄二」

「ほなさいなら」

「ああ、明日のためにもしっかり休んでおいてくれ」

雄二、明久と別れ、紫苑と二人で帰路に着く

「やはりDクラス相手ならまだ余裕だな」

「そないなこと言うて自分はなんもしてへんからに」

「ごめん、ごめん。でも紫苑がいたからだぞ」

「へ？」

「紫苑がいたから俺はあそこで楽できたんだ」

まあ紫苑がいなかったら姫路にお願いしていたが
あまり女子の前でかつこ悪いことはしたくないので紫苑がいてくれ

て本当に助かった

「勝てたのはお前のおかげだ。ありがとう」

「え？そ、そやん？そないならええんだけれど」

人に礼を言うなんて久しぶりだ

難しいもんだな

しかしさつきから紫苑はなにをもしもじしてるんだ？
顔も赤いし

「なあ、紫苑？」

「え？なに？」

「お前風邪でもひいてるのか？」

「いや、そないなことないよ」

「でも、顔赤いぞ。熱でも出てるんじゃないか？」

そついつて紫苑の額に俺の額を合わせる
すると紫苑の顔はもつと赤くなった

「お前、本当に大丈夫か？顔すごく赤いぞ」

「え、そ、そら」

「もしかしてテストで無理でもしたのか？」

「いや、そうおへんよ」

「だったら朝走らせたのがいかなかったか。すまん、俺のせいだよ
な」

まさか、俺がコイツに無理をさせていたのか
そうだとしたら、俺は最低なんじゃないか？
どうにかしなければ、体調が悪いなら……

「大丈夫そやし、とにかく気にせんといて」
「そうか……お前がそういうならいいんだが……」

俺と紫苑はその後二人並ん帰っていった

+ + + +

翌朝、いつも通りに学校へ行く
クラスの大半は今日は補充のテスト潰けだ
だが、俺は昨日回復試験を受けているのでゆっくり出来る
しかし四教科補充テストしてる間俺は何をしていればいいんだ？
そんな事を考えていると明久と島田さんの話が聞こえてきた

「おかげで彼女にしたいくないランキングが上がっちゃたじゃない！」

島田さんならばダントツのトップかと思っていたのだがまだ上が
いたのか
怖い学園だ

「——と、本来は掴みかかっているんだけど」

島田さんはそんな事をいっと言っているが、明久の顔は既に殴られ
たような跡があり

鼻血が滝のように流れている

自身の行為が自分を貶めていることに気付いていないのか？

「アンタにはもう充分罰が与えられているようだし、許してあげる」

しかしここまで怒らせるとは明久はいつたい彼女に何をしたんだ

「うん、さっきから鼻血が止まらないんだ」

「いや。そうじゃなくてね」

「ん？それじゃ何？」

「一時間目の数学のテストだけど。監督の先生、船越先生だつて」

明久、死ぬなよ…………俺を手を合わせ明久に向け合掌した

四時限目が終わり昼休み

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！今日はラーメンとかつ井とカレーと炒飯にすつかな？」

「あつ、じゃあウチも一緒にいい？」

「それじゃ僕は、贅沢にソルトウォーターでも」

塩水を贅沢つて…………泣けてきそうだ…………

「あれ？真人どうしたの？なにかあった？」

「明久、奢つてやるから塩水を贅沢というのはやめてくれ…………

」

「あ、あの」

「ん？姫路さんその重箱はなんだ？」

「約束の…………お弁当です」

恐る恐る重箱を見せる姫路さん
それを見た全員は歓喜した

「じゃったらこんな汚い教室ではなく屋上で食べんか？」

秀吉の提案を受け入れ屋上で食べることに

「そうだな。今日は天気も良いし、ちょうど良い。それじゃ先行つて場所を確保してくれ。飲み物買ってくる」

「あつ、それならウチも行く。1人じゃ持ち切れないでしょ？」

雄二と島田さんは1階の売店へ

俺たちは屋上へ行く

屋上から空を見上げると空はよく晴れた青空だった

姫路さんがビニールシートを敷きその上に座る

いい空だ・・・寝るのに丁度いい

俺はそのまま寝てしまった・・・・・・・・

・・・コレは一体どういうことだ？

俺が目を覚ました時には目の前に雄二とムッツリーニが倒れていた

「起きたようやね」

「なあ？何があつたんだ説明してくれないか？」

「えーと・・・・・・・・」

「なんで死体が転がってるんだここはさつじ・・・・・・・・」

「真人！！ストップ」

明久と秀吉、紫苑、姫路さんに現状を説明してもらおうと声を出したら

明久に止められた

（真人、すこし静かに・・・）

（分かった、で何が原因なんだ？）

眠っていた俺にはなにがおきたかが点で分からない

（実はね・・・ムツツリー二が姫路さんの弁当を食べて倒れて、次に卵焼きを食べた雄二が倒れたんだ。でも姫路さんはそれを分かってないし二人が死ぬ直前に言ったおいしって言葉を信じているみたいなんだ。そして今は邪魔な事を言いそうな島田さんを排除した所）

明久の説明を聞いた俺は恐怖した

まさかこの世にそんなものが実在するとは思ってもいなかった

（まあ、現状は分かった、それでこの残りはどうするんだ？誰かが食べなければならいんだろう？）

（そうなんだけど、真人食べてみない？）

（お断りだ、わざわざ自分から死に行くようなことはしない）

（そんなこと言ったら誰が食べるんだよ）

（仕方がない、ワシがいこう）

（ダメだよ秀吉、死んじやうよ）

（秀吉を犠牲にさせるわけには行かない。俺に作戦があるみんな聞いてくれ）

（作戦？）

（雄二なら大丈夫だろ？体が丈夫なんだから）

（そういうことか了解）

（お前達なにを話していたんだ？）

（ああ、気にしないでいいよ）

復活した雄二は置いておいて

雄二を犠牲にする作戦が決行されることになった

「あのー？みなさんどうしたんですか？」

「い、いやなんでもないよ。姫路さんアレなんだ！？」

「え？なんですか？」

そういつて明久が指差した方向を見る姫路さん
意外と単純だ

（おらあ！）

（もごああっ！？）

その隙に雄二の口の中に弁当を流し込む明久

「ふう、これでよし」

「……お主、存外鬼畜じゃな」

尊い犠牲というものだ

「あれ、早いんですね。もう、食べちゃったんですか？」

「うん、雄二が『美味しい美味しい』て凄い勢いで」

雄二はそんなこと一言もいってないが姫路さんのために感謝は言っておく

「そうですかー嬉しいです。」

「いやいや、こちらこそありがとう。ね、雄二？」

「う……うう……。あ、ありがとうな姫路……」

そういった雄二の目は虚ろだった
死ぬなよ、雄二

「あの、実はですねー」

「ん、どうしたの？」

姫路さんが鞆の中をあさりだした
え、まさか……

「デザートもあるんです」

そのまさかだった……

「ああ、あれはなんだ！」

「明久！次は俺でもきつと死ぬ！」

この状態で雄二が生きていること事態がすごい
さすがにそんな雄二にデザートを食べさせるほどの鬼畜は居らず・

「ワシがいこう」

（秀吉！？無茶だよ、死んじゃうよ！）

（俺のことは率先して犠牲にしたよな！？）

（秀吉、やめておけ。死ぬぞ）

（大丈夫じゃ。ワシの胃袋はかなりの強度を誇る。せいぜい消化不良程度じゃろう）

もはや弁当ではなく危険物を取り扱っているような会話だった

「どうかしましたか？」

「あ、いや、！なんでもない」

「あ、もしかして……」

まさか自分の弁当の怖さに気付いたか？

「ごめんなさいっ。スプーンを教室に忘れてきちゃいましたっ」

姫路さんの天然さが怖く思えた時だった

「では、この間に頂くとするかなの」

秀吉が果敢にも容器に手を触れる

「……すまん。恩に着る」

「ごめん。ありがとう」

「お前の死は無駄にはしない」

「別に死ぬわけでもあるまい。そう気にするでない」

そして、容器を傾け、一気にかきこむ木下。

「むぐむぐ、なんじゃ、意外と普通じゃとゴばあっ！」

自称『鉄の胃袋は』白目で泡を吹いていた。
なんて恐ろしい弁当だ

「……雄二」

「……なんだ？」

「……さつきは無理に食べさせてゴメン」

「……わかってもらえたならいい」

その光景を見て明久も自身の行動を悔いている

昼食を終え、全員がある程度回復してお茶をすす

「それで試召戦争だけど、次はBクラスなんだったな？」

「俺たちじゃ真正面からぶつかった処で、Aクラス相手に勝ち目はないからな」

雄二にしては珍しい発言だった

まさか戦う前から負けを確信するなんて

まあ学年最強のAクラス相手にFクラスが勝つことが無理なんて分かりきっていることだが

雄二ならナント力してくれるだろう

「それじゃ、ウチらの最終目標はBクラスに変更でこと？」

島田さんがそう言うがそれは雄二の性格上絶対ない

「それで、どうする気だ？」

「Bクラスとこの戦争のシステムを使って、Aクラスとの戦争は一騎打ちにする」

「システム？」

「ああ。下位クラスが負けたらどうなるか知ってるか明久？」

「え！？ えーっと……」

（吉井君、負けたらランクを1つ落とされるんですよ）

姫路さんがすかさず明久に助け舟を出す

「あつ、そうそう。で、下位クラスが勝ったら設備を入れ替えが出来るんだっただね？」

「では、上位クラスが負けた場合は？」

「悔しい」

明久は本当にバカだな

「ムツツリーニ、ベンチ」

「僕を爪切り要らずの身体にするきか!？」

「相手クラスと設備が入れ替えられちゃうんですよ」

また姫路さんが助け舟を出す

「だからこのシステムを使って交渉しようと思う

「交渉ですか？」

「Bクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにAクラスへと攻め込むように交渉する。設備を入れ替えたならFクラスだが、Aクラスに負けるだけならCクラスの設備で済むからうまくいくだろ」

「そうしたらAクラスは連戦をおそれ一騎打ちを呑む。そういうことか」

全員が作戦を理解するがまだ疑問は残る

「しかし、上手く行くのか？ 向こうなら連戦でも勝てる自信があるんじゃないか？」

「そうじゃな。姫路の事も既に知れ渡っておるじゃろうし」

「それに関しては考えがある。それよりまずは、Bクラス戦だ」

しかし雄二以外頼れるものはいないので雄二を信じることにする

「ということで明久、今日のテストが終わったら、Bクラスに宣戦布告してこい」

雄二は明久を殺す気なのか？

「断る、雄二が行けばいいじゃん」

さすがに昨日で理解したのか断る明久

「だったら・・・・・・・・」

「俺が行く。さすがに昨日の事件で俺がFクラスにいることもばれてるだろうしいいよな？」

「まあお前がそういうんなら止めはしないが、一応明久ついていけ」

「まあ、真人と一緒になら怪我をすることもないか・・・・・・・・」

そついうことで二人でBクラスに行き宣戦布告

Bクラス対Fクラスの試験召喚戦争が幕を開けたのだった

第五問

問題

以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい

『光は波であつて、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

柊真人の答え

『粒子』

教師のコメント
よく出来ました

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の回答には、先生はいつも度肝を抜かれます

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

今日も午前中は補充テストに使っていた
まあ俺は暇だったので面倒だが情報集めに走っていた
そこで面白い情報が取れたのでよしとしよう
今回は廊下での戦闘に勝ちに言っているので
戦力は50人のクラスの内40人を投入するらしい
その中にはFクラス最強の戦士姫路さんも含まれている
Fクラスの生徒はそれだけで士気を極限まで上げている
バカな奴らだ

キンコーンカーンコーン

昼休み終了のチャイムが鳴る
戦争の開始だ!!

『いたぞ、Bクラスだ!!』
『高橋先生を連れて居るぞ!!』

正面を見るとBクラスの生徒がゆっくりと歩いてくるのが見えた
40人近くいるFクラスと違いBクラスの生徒は10人程度…様子
見という事だろう……が

『Bクラス 野中長男 総合1943点』

VS

『Fクラス 近藤吉宗 総合764点』

『Bクラス 金田一祐子 数学159点』

VS

『Fクラス 武藤啓太 数学69点』

『Bクラス 里井真由子 物理152点』

VS

『Fクラス 君島博 物理77点』

Dクラスとは違い

Fクラスの生徒では手も足も出ない

これは放っておいたら壊滅しそうだな

そんな事を考えていたらBクラスの生徒が近づいてきたので迎え撃つ

『Bクラス 宮本修二 物理149点』

VS

『Fクラス 柊真人 物理348点』

「え！？お前本当にFクラスか？」

「Fクラスだよ……一応」

俺の召喚獣の装備は武者鎧に刀、和風だろ

紫苑の召喚獣も和風なんだけどね

その召喚獣が相手の召喚獣を居合の構えから一刀両断する

召喚者の特性も出るようで俺の召喚獣は居合切りができる

早抜きならだれにも負ける気がしない

「これで1人、残り九人」

「Bクラス田中長男が柊真人に総合科目で勝負」

「総合か、いけるかな」

『Bクラス 田中長男 総合科目1943点』

VS

『Fクラス 柊真人 総合科目2576点』

「余裕だったわ……」

そういつて相手の召喚獣に一撃を食らわせる

弱った召喚獣は他の奴らに任せておけばいいだろう

俺はBクラスの点数を減らす

それに集中させればいい

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」

「おいおい、大丈夫？」

「はい……平気、です……」

息絶え絶えの姫路さん登場

これで大分楽になる

「来たぞ、姫路瑞希だ……！」

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です！ Fクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込みます！」

「律子、私も手伝う！」

10人しかいない戦力の内2人も向かわせる

姫路さんを大分警戒しているようだった

『Fクラス 姫路瑞希 数学412点』

VS

『Bクラス 岩下律子&菊入真由美 数学189点&151点』

…しかし姫路さんの召喚獣の腕には高得点者しか手に入れない腕輪が……

姫路さんの召喚獣は腕輪の特殊機能で相手の召喚獣1体を燃やしもう一体を大剣で薙ぎ払った

それだけでBクラスは二名戦死

残りの戦力は7人となり内1人が重傷という状況だ

「みつ、皆さん、頑張ってください！」

「……おおーっ！！！！」

姫路さんが敵を軽くなぎ倒したこともあり

士気は大幅アップ

「姫路さん、すまないけどここは任せたよ。」

「え？あ、はい」

大丈夫そうなので前線を姫路さんに預け、俺は一路とある所へ

明久side

僕たちはBクラスの代表が根本と聞いて教室に戻ることにした

なんたつて根本恭二という人間は最悪で最低なクズだからだ
テストでカンニングは普通、喧嘩で刃物はデフォというクズだ

まあ真人も喧嘩する時は刃物、持ってるんだけどね……

「こりゃひどい……」

教室に帰った僕たちを出迎えたのは傷だらけの卓袱台に、へし折られたシャーペンや消しゴムだった

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」

雄二が割って入る

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印のために、教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

「ああ。4時までに決着がつかなかったら、戦況をそのままにして続きは明日午前9時に持ち越し。その間、試召戦争にかかわる一切の行為を禁止するつてな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

なんでだろう？こっちとしては体力勝負に持ち込んだ方が有利だろうに

「今日の戦闘は相手を教室に押し込んだら終了だ」

「そないならばこっちとしても姫路が万全の状態で戦えるから都合がええって事だね」

なるほどそう言う事か

雄二に続いて入ってきた紫苑さんが説明してくれる

「そう言う事だ」

「問題は相手があの根本だってことやね……多分これだけで終わるはずがないやろ」

「そこは心配だが乗った方がこちらがいいのでな……まあ一応注意しておいてくれ

明久、秀吉は前線に戻れ、俺はここでシャーペンや消しゴムの手配をしておく」

「了解」

そついつて僕と秀吉は前線に戻る

そこにいたのは人質をとっているBクラスの生徒二名だった

雄二side

Fクラスの教室に血まみれの明久と同じく血まみれの島田が帰って来た

明久はその後姫路に介抱され、島田は淀れた服を洗いに行った

「……ここはどこ？」

明久が起き上がる

俺は起きた明久に戦況を説明する

「一応計画通り教室前に攻め込んだ、最も、こちらの被害も少ないがな。このメモを見ておけ」

「……………」

「ん？ ムツツリーニ。何か変わった事があったか？」

「……………（コクリ）」

気がついた明久に、いつの間にかいたムツツリーニが近づいていた彼は今回出番が来るまで情報収集にいそしんでおり、周囲を警戒していた

「Cクラスが、試召戦争の準備を？」

「……………（コクリ）」

「狙いはAクラスじゃないだろうから……………大方、漁夫の利を狙うつてところかな？」

「んー、そういうことならCクラスと協定でも結ぶか。Dクラスを使えば難しい事でもないだろう」

CクラスとFクラスが協定を結ぶのはそう難しい話ではない
そう確信した俺たちは作戦に必要な秀吉を残し一路Cクラスへ
途中で会った須川と美波も盾代わりにメンバーに加える

「Fクラス代表の坂本だ。このクラスの代表は居るか？」

扉を開くなり大声でそう告げる

「私だけど何か用かしら？」

俺たちの前に出てきたのは気の強そうな女生徒。小山友香だ

「Fクラス代表として……………」

そこまで言った俺に二人の生徒が目に入る

1人は根本恭二、俺は根本を見て言葉を詰まらせるが

1人の生徒からの目配せで話を続ける

あいつめ…終わったら説明してもらうからな……

「……クラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

いやらしい笑みを浮かべる小山

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本君？」

小山は振り返り教室の奥にいた根本に声をかける

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

「根本君！Bクラスの君がどうしてここに！」

取り巻きを引き連れた根本が奥から出てくる

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する一切の行為を禁止したよな」

「何を言って……」

「先に協定を破ったのはそっちだからお互い様だよな」

根本が告げると同時に取り巻きが動き出す、その背後には数学教師の長谷川教諭

「長谷川先生！Bクラス芳野が召喚を」

「させるか！Fクラス須川が相手になる。サモン！」

須川では相手にはならず俺たちは急いでFクラスに戻る

途中体力が持たず立ち止まる姫路

明久は自ら名乗りを上げて時間稼ぎをすることに
ここで姫路を失うわけにはいかないので
明久に任せることに

「坂本君、吉井君は、大丈夫、なんですか……」

姫路が泣きそうな声でいう

「もちろんだ。他の奴ならともかく、明久ならなんとかなる」

「……でも」

「坂本、お前何言って……」

「確かにあいつは勉強が出来ない。でもな、学力が低いからといって、すべてが決まるわけでもないだろう？」

「そ、それは、どういう……？」

「あのバカも伊達に 観察処分者 なんて呼ばれてないってことだ」

あいつにはあいつでできることがある

+ + + +

「あー、疲れた！」

「よ、吉井君！無事だったんですね！」

吉井に姫路が駆け寄る。

「うん、これぐらいなんとも……って痛い！」

爪先を踏み抜かれる吉井。

「し、島田さん。僕が何か悪い事でも」

「（キツ！）」

「あ。いや美波」

射殺すような目で明久を睨みつける島田

「……随分と二人とも仲良くなってますね？」

「え？これで？」

「お。戻ったか。お疲れさん」

明久に近づく

こんなことでいちいち心配なんてしてられるわけがない

「無事じゃったようじゃな」

秀吉もやってきて、土屋も明久を見て小さく頷く、秀吉たちも明久がやられるとは思ってなかったようだ

「さて、お前ら」

その場に残る全員を見渡し告げる

「こうなった以上、Cクラスも敵だ。同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後のCクラス戦はきつい」
「それならどうしようか？このままじゃ勝ってもCクラスの餌食だよ？」

「そうじゃな……」

「心配するな」

頭を悩ます明久達に笑顔で告げる

「むこうがそう来るなら、こっちにも考えがある」
「考え？」

「ああ。明日の朝に実行する。目には目を、だ」

明日が楽しみだ

この日はこれで解散し、続きは翌日に持ち越した。

第六問

問題

『ベンゼンの化学式を答えなさい』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント
簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント
君は化学を舐めていませんか

吉井明久の答え

『 $B-E-N-Z-E-N$ 』

教師のコメント
後で土屋君と一緒に職員室に来るように

柊真人の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

普通に難なく出来てますね。流石です

「昨日言った作戦を実行する」

翌朝、登校した真人たちに雄二は開口一番そう告げた

「作戦って何のことだ？」

しかし昨日その場にいなかった真人は疑問を持つ

「そういえばお前は昨日いなかったな。一体何処に居たんだ？」

そういった雄二の顔はえらくにやけていた

「まあ、いろいろあつてな……」

「作戦って、まだBクラスとの開戦には早いよ？」

現在時刻午前8：30開戦時刻まで30分近くある

「BじゃないCクラスだ。その為に、秀吉にこいつを着てもらっ」

そっいつて雄二が鞆から取り出したのは文月学園の女子の制服

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「いや、そこは構えよ、これで秀吉に姉がいることを利用してAクラスの使者としていさせるんだな」

「その通り。秀吉は姉と瓜二つだからCクラスでは見破る事は不可能だ」

優子と秀吉は二卵性双生児だが、一卵性双生児なんじゃないかと思うぐらい似ている

それこそ違うのは話し方と成績ぐらいだ

「と言う訳で秀吉、用意してくれ」

「う、うむ……」

雄二から制服を受け取り、その場で着替え始める秀吉

明久を初めとするFクラスの生徒はその光景に釘付けとなり

ムツリーニはその横でもものすごい速さでカメラのシャッターを切っていた

「よし、着替え終わったぞい。ん？ 皆どうした？」

「さあ？」

「俺にはわからん」

秀吉、雄二、真人が疑問符を浮かべる

この中で秀吉にときめいていないのは最早男では雄二と真人だけになっていた

その後、明久と雄二、真人、秀吉の四人はCクラスへ

Cクラスからある程度離れたところに明久と雄二、真人は身を隠す

秀吉は姉に成りすますことに乗り気ではない秀吉は力なくCクラスに向かう
それを明久は心配そうな顔で見るが雄二は自信満々といったように見送った

「ごめん、ちょっと用事が出来た」

「そうか、早く戻って来いよ」

そういつて真人は明久たちと別行動を開始した
雄二はニヤニヤしながら真人を送り出した
そんな雄二に明久は持っていた疑問をぶつけた

（ねえ雄二、最近真人おかしくない？）

（どうしてだ？）

（だってさ、昨日だって途中でどこか行ったりさ、補充テストの時だっていなかったじゃないか）

（ふむ、明久にしてはしっかり見てるな、っと秀吉が教室に入るぞ）

「静かにしなさい、この薄汚い豚ども！」

Cクラスの扉を開けるなり秀吉は教室中に聞こえるようにそう叫んだ

「な、何よアンタ！」

秀吉のいきなりの罵声に怒ったように返す小山

「話しかけないで！豚臭いわ！」

しかし秀吉はそんなこと気にもせず話し続ける

「アンタ、Aクラスの木下ね？ちょっと点数がいいからっていい気になってるんじゃないわよ！何の用よ！」

小山はあいてが秀吉だと言うことに気づいていない

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！貴方達なんて豚小屋で充分だわ！」

「なっ！言っに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって!？」

「Fクラスは豚小屋じゃないよ」

「まあ小山の中ではFクラス＝豚小屋なんだろ」

明久のツツコミに対して雄二は呆れたように返答する

「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、今回は特別に貴方達を相應しい教室に送ってあげようかと思うの。ちやうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！」

そう言い残し、秀吉は戻ってきた

「これで良かったかのう？」

秀吉の顔はえらくすつきりしている

「ああ、素晴らしい仕事だった」

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！Aクラス戦の準備を始めるわよ！」

Cクラスからは小山のヒステリックな声が響き渡った

（明久、お前の持っていた疑問はBクラス戦の後で説明してやる）
（うん、分かった）

一行はFクラスへ

「副指令は真人にお願いする」

「俺？秀吉に頼んでくれよ」

「分かった、秀吉お願いするな」

「俺も用事がすんだら参加する」

「染色は俺の警護を頼む」

「任せときんしゃい！！」

+ + +

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！ 戦線を拡大させるでないぞ！！」

午前九時よりBクラス戦が再開されFクラスは昨日中断されたBクラスの前から進軍している

雄二の指示は、『教室内に敵を閉じ込めろ』でということで、ここ数時間はうまくやれている
しかしここで問題がおきている

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！ 補給も念入りに行え！」

本来ならば秀吉よりも率先して指揮を取るべき瑞希が動かない
瑞希が動かなければ戦力も足りないので戦線も厳しくなってくる

「すまない、遅れた。戦況はどうなってる？」

そこへ用事をすませた真人が参加する

真人は瑞希ほど突破力はないので後ろで控えめにいる

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

さすがに文系のBクラスに文系でFクラスが挑むのには無理があった

「姫路さん援護を！！」

午後の作戦に必要と言うことで、後ろに下げられていた瑞希だが
さすがに頼らなければならないと思った明久は瑞希に救援要請をだす

「あ、そ、その」

しかし肝心な瑞希は戦線に加わらずオロオロしている
それを見た真人は

「姫路はまだ出すべきじゃない！」

イラつきながら明久に言う

「だったらどうするの？」

「古典か……あれがあつたな、明久頼む！！」

「わかった！」

明久は古典の竹中教諭に駆け寄り耳打ちをする

「……ッラ、ずれてますよ？」

「っ！！ 少々席をはずします！」

「よし、今のうちに体勢を立て直すぞ！！」

文系が得意ではない真人はBクラスの平均程度の点数しか取れないので時間稼ぎ程度しか出来ない
その上、瑞希の様子がおかしいのではFクラスも士気を保って置かれず戦況は悪くなる一方である

「姫路さん、一体どうしたの！？」

「そ、その、なんでもないです」

明久が様子のおかしい瑞希に駆け寄った。

瑞希の大げさな反応に何かがあったことを確信する明久

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Bクラス内に拉致された模様！」

戦況はどんどんBクラス有利へと変わって行く

「私が行きますっ！」

そういつて瑞希が駆け出した、・・・が

「あっ……！！」

急に動きを止めて俯く

明久はふと、瑞希の視線を追っていく

そしてその先にあった……根本の手にある封筒に目を付けた

「あれは……！」

「どうした、明久？」

真人もその視線を追い、根元の手にあるものに気付く
あれをみたことで瑞希の行動が止まったことで真人はひとつの結論
にたどり着く

（明久宛のラブレターか……）

「……なるほどね、そういうことか」

明久が納得したような声をあげる

今回の協定の内容は姫路さんが参加する事を考えるとFクラスに有利だ

しかし姫路さんが動かなかつたら？……Bクラスに有利な条件となる

「姫路さん」

「は、はい……？」

「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気を付けてもらわないと」

明久は瑞希を戦線から外れるよう説得する

その間真人はアイコンタクトで秀吉に説明をする

「明久、行くぞ」

「うん！」

「秀吉、頼んだぞ」

「任せておくのじゃ」

「あ……！」

真人と明久はその場に背を向けFクラスの教室へ急ぐ
そして……

「面白いことしてくれるじゃないか、根本君」

「まさか明久の口からそんなことが聞けるなんてな」

「意外だったかな」

「いや、俺も同じような気持ちだ」

二人は顔を向かい合う、真人の顔はいつもと変わらぬ笑顔だ、反対
に明久の顔は怒り1色だった

「あの野郎、ぶち殺す！」

第七問

問題

以下の問いに答えなさい

『goodおよびbadの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good? better? best
bad? worse? worst』

教師のコメント

その通りです。

柊真人の答え

『いい かなりいい 最高
悪い かなり悪い 最悪』

教師のコメント

君は英語を舐めているのですか

吉井明久の答え

『good? gooder? goodest』

教師のコメント

まともな間違え方で先生驚いています。Goodやbadの比較級と最上級は語尾に-erや-estを付けるだけではダメです。覚えておきましょう

土屋康太の答え

『bad? butter? bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』

「雄二!」

「うん? 明久に真人か、脱走ならチヨキでしばらくぞ」

Fクラスの教室にて

ノートに戦力を書き記している雄二

「話がある」

「……とりあえず聞こうか」

いつもより真剣な顔つきの明久に雄二もおのずと真面目になる

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があつたんだ?」

「明久、それじゃ誤解される。俺たちが言いたいのはこのうだ、あのクズやるうに最高のお仕置き、いや罰をしてやろうとおもったんだ」
「罰?……どんなだ?」

真人は雄二に耳打ち

すると雄二は

「考えることは同じだな、俺もそうしようと思っていたところだ」
「それじゃ良かった。で、すまないが姫路さんを戦線から外させた
いんだが」

「理由は？」

「理由はいえない」

「どうしてもなのか？」

「うん」

明久も真人も自分達が無理を言っていることは重々承知だ
今回のBクラス打倒の作戦は瑞希があつて始めて成功する
よつて彼女がいなければそれが原因で負けることもある
もし負けたなら責任を負うのは当然クラス代表である雄二

普通なら、こんな頼み受け入れない

「……条件がある」

「何だ？」

「明久、真人、お前達が姫路の担う予定だった役割を果たすんだ。
どうやってもいい、必ず成功させる」

しかし雄二は普通とは違った
顔を見合わせ頷き合う二人

「わかった。絶対に成功させて見せる！」

「何をしたらいいんだ？」

「良い返事だ。仕事はタイミングを見計らつて根本に攻撃を仕掛け
る、それだけだ」

「皆のフォローは？」

「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

今現在、Bクラスの戦闘は出入り口で行われており根本に行くにはそこを突破してBクラスの広い教室の奥に行くしかない
しかしそんな突破力は二人にはない

「明久、お前は確かに点数は低いが、お前だけにあるムツツリーニや秀吉のように秀でている部分を信じている」

そういうと、雄二は立ち上がり教室の外へ。

「うまくやれ、失敗は許されない」

そっぴい残すと雄二はDクラスに作戦の指示をする為教室を出て行った

明久が、ふと或る事を思い出した

自身が一体なにあるかと、その特徴について

「何か、策があつたのか？」

「うん！ 真人は出入り口で戦線維持を頼む」

「わかつた、頑張れよ」

「うん！」

明久は何かを思いついたかのように補充テスト中のFクラスの面々を引き連れDクラスへ向かつた

「田中先生でも呼ぶか……………」

+ + + +

日本史の田中教諭を引きつれ

日本史のフィールドで指揮をとる真人

現在の時刻は午後二時五十七分。作戦開始まであと三分

出入り口には瑞希が参戦できなくなった分の戦力不足を補う為に雄二率いる本隊が来ていた

ドオンッ！ドオンユ！

「お前らいい加減諦めるよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての」

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマは、そろそろギブアップか？」

「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？ 染色も柊も突破力が無く、頼みの姫路さんは調子が悪そうだぜ？」

「お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「けっ！口だけは達者だな。負け組代表さんよ」

二人とも相手を挑発しあっていた

それを見ていた真人は根本の小物さに笑いが止まらなかったというかかった時のことしか考えていなかった

ドオンッ！ドオンッ！

「それにしてもさっきからドンドンとうるさいな」

音が次第に大きくなっていく

作戦決行時間までもうすぐとなったところで

「……態勢を立て直す！一旦下がるぞ！」

雄二の指示に従い全員が後退する

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

「あとは任せたぞ、明久」

雄二は壁の奥にいる明久に向かって叫んだ

「だあああああつつしやあああああああ！……！」

ドゴオっ！……！！

「ンなっ！」

Fクラスの本隊がBクラスから離れると明久の叫び声と壁の壊れる音が廊下中に轟いた

その直後に根本の驚いたような声

真人はそういうことか、と納得。あとは明久に任せることにした
パニックになるBクラスの生徒達

「どう言おうとも、お前達が俺たちに騙されて負ってきたところで勝負は決していたんだ。残念だったな……！」

雄二がドヤ顔で叫ぶ

「い、いやまだだ、敵の主力はこっちにいるんだ。根本の周りには

近衛隊がいるんだからあつちは問題ない。俺たちが狙うのはこつちだ」

しかしその仲でギリギリ平静を保っていた生徒が指示する
よく分かつてるな、と真人は関心する

「俺たちが倒せるかな？」

それに相対する雄二

「見せてやれ！！真人、お前の実力を！！」

「おう！！」

向かってくるBクラスの生徒の前に立つ真人
そしてお決まりのセリフを言う

『サモン
試獣召喚』

『Fクラス 柊真人 英語W 5点』

VS

『Bクラス 梶原博 英語W 158点』

「つてアホかー！！」

真人が声をあげる

知っている通り真人は英語が苦手だからだ

「すまんすまん、染色頼んだぞ」

「なんでうちが……」

そういつて真人が下がり、紫苑が代わりにフィールドに入る

『Fクラス 染色紫苑 英語W 323点』

VS

『Bクラス 梶原博 英語W 158点』

そして相手の召喚獣は紫苑の召喚獣の太刀で一刀両断された

それを見ていた真人は連れてきていた田中教諭を呼び寄せ最前線に

「今度こそいける、Fクラス柊真人がそこらへんのBクラスに日本史で勝負を挑みます」

自信満々な真人はBクラスの生徒に当たり構わず勝負を申し込む

『Fクラス 柊真人 日本史 425点』

VS

『Bクラス 岡崎百合 日本史 162点』

『400点越えだつて!?!』

「コレが俺の実力だ、じゃあな」

そういつて真人の召喚獣が相手の召喚獣を居合い切りで真つ二つにした

『無傷で倒すだ?!?!』

「さゝて次はお前だ」

真人はたのしそくに戦う相手を選ぶ

その姿はいつもと違い活き活きとしている

「そないなことせんと早うBクラスに行きましよう」

「……………が紫苑がそれを止め、二人ともDクラス経由でBクラスに行く

そこは

『Fクラス 土屋康太 保健体育 441点』

VS

『Bクラス 根本恭二 保健体育 203点』

二人がBクラスに来た時はムツツリー二が根本を倒した後だった

「土屋……………すごいね……………」

「流石ムツツリー二だ」

今ここにBクラス戦は終結した

第八問

問題 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

柊真人の答え

『初花』

教師のコメント

正解です。が、よく知ってますね

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事

を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1・5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される」

教師のコメント

詳しくすぎです

真人side

「明久、随分と思いついた行動にでたのう」

終戦後、Bクラスにやってきた秀吉は明久にそんな事を言う

「うう……。痛いよう、痛いよう……」

自らの手でやって無いと言っても素手で鉄筋コンクリートを壊したのである

そのフィードバックは相当のものだろう

「なんともお主らしい作戦じゃったな」

「で、でしょ？もつと褒めてもいいと思うよ？」

「後のことを何も考えず、自分の立場を追い詰める、男気溢れる素晴らしい作戦じゃな」

「……遠まわしにバカって言ってるじゃない？」

「ハハハ明久はバカだろ？」

「ひどいよ！！」

明久の行動が問題にならないわけがなく

今日の明久の放課後の予定は職員室で鉄人達とのデートだ
しかし初犯じゃなかったら留年も退学も十分あったと思う

「ま、それが明久の強みだからな」

雄二が明久の肩を叩く

明久の方はバカが強みと言われショックを受けているようだが

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組み代表？」

「覚悟しろよ？卑怯野郎」

「……」

今の俺の目には先程までの姿が嘘のようになくなった根本の
姿しか映っていなかった

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に周囲の連中が騒ぎ始める

「落ち着け皆。前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ。ここがゴールじゃない」

「ここはあくまで通過点。そついいたいんだろ？雄二」

雄二の言葉に相槌を打つ

「ああ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやろうと思っている」

雄二の発言に納得したような顔になるFクラスの面々
どうやら皆雄二の性格を理解してきたようだ

「……条件はなんだ？」

力無く問う根本

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やって貰ったし、正直去年から目ざわりだったんだよな」

雄二の言っている事は普通の人に言えば酷い言い様だが相手は根本だ
それだけのことをアイツはやってきた。だからこそ周りの人間は誰一人としてフォローをしない

そこんところは本人も理解しているようだ

「そこでお前らBクラスに特別チャンスを与える。Aクラスに行つて、試召戦争の準備が出来てると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやつても良い。ただし、宣戦布告はするな。すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備がある

とだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

本当ならばこれで終わらせるつもりだったんだがこいつには借りがある

「ああ。Bクラス代表がコレを着ていったとおりにしたら見逃そう
そう言い。雄二が取り出したのは、朝、木下が来ていた制服。これ
は明久が制服を手に入れるための手段だが恐らく雄二の個人的感情
も含まれてるだろう。」

「ば、馬鹿なことを言うな！この俺がそんなふざけたことを……！」
根本が慌てふためく。

『Bクラス生徒全員で必ず実行させよう！』

『任せて、必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守るなら、やらない手ないな！』

これだけで根本の人望の無さがうかがえる

「んじゃ、決定だな」

「くっ！ よ、よるな変態ぐふうっ！！」

「とりあえず、黙らせました」

逃げようとした根本にBクラスの生徒から腹に一撃

「お、おう。ありがとう」

流石の雄二も変わり身の早さに驚いている

「では着付けと行きますか、明久」

「了解っ」

ぐったりと倒れる根本に近づき、服を脱がせる

「うげえ……男の服を脱がせるなんて想像以上に苦痛だ……」

「そうだけど……これも目的のためだから……」

「同じ人間でもこうも違う物なのか……」

「うつ、うつ……」

うめき声を発する根本

気持ち悪いな……仕方がない

「明久、少し避けて」

「うん」

「たしか兄貴から借りたものが……」

うめき声を上げる根本から明久を離したら懷をまさぐる

たしか懷に入れたはずだ

「ええつとこれだ……ていつ!!」

「がふうっ!!」

流石に刀で殴るわけにはいかず

兄貴から借りたスタンガンで眠らせ

見慣れた男子の制服を剥がし、女子の制服を着させる

「うーん……これどうするんだろう?」

「こうだったかな……いやこうだったかな」

男子の制服とは勝手が違う、正直どう着せたらいいかが分からない

「私がやってあげるよ」

「そう？　じゃあ折角だし、可愛くしてあげて」

そう提案してくれたBクラス的女子に明久が冗談じみた提案をしたら

「それは無理、土台が腐ってるから」

酷い答えが返ってきた

ひどい言われ様だ。流石根本。と言った所か

「さつさと物を回収したらこんなもん捨てて帰ろうぜ」

「酷い良い様だね……」

「そうか？　そうだ明久、消毒液いるか？」

「一応もらっておくよ……」

俺達はBクラスを後にし廊下に出る

根本の制服を探る

「……あつたあつた」

嬉しそうに声をあげた明久は封筒をポケットに入れ用済みな制服をゴミ箱に捨てた

これで根本は家に帰るまで女子制服の着心地を楽しめるだろう

「じゃあな、明久」

「ちよつと待って」

「へ？　何かあつたか？」

帰ろうとした俺を明久が止める

「いや、雄二が来たら話してもらおう……」
「いったいなんだっていうんだ」

とりあえず姫路さんが見えたので空気を読んで教室から出ることに

『こ、この服、やけにスカートが短いぞ!』

叫び声に反応して目を向けると

そこには女子制服を着てリボンをつけている一変態 根本 の姿が

「おえ……ひどいもん見ちまった……」

なんてこった提案したのは俺だがまさかこんなおぞましいものが出
来上がるとは思わなかった……

「おつ、お前は柊!提案したのはお前だそうじゃないか!」

そう言つてつかつて来そうな根本だが付き添い二人に阻まれる
いい気味だ

『いいからきりきり歩け』

『さ、坂本め!よくも俺にこんなことをー』

『無駄口を叩くな!これから撮影会もあるから時間がないんだぞ!』
『き、聞いてないぞ!』

どうやら撮影会までスケジュールに入っているようだ
根本はこの日が忘れなくなるだろうな

そういえば明久が何か用があるって言ってたな
雄二が来てからと言っていたが雄二は来れないだろうし先に用件で
も聞いておくか

俺は姫路さんが出たのを確認してFクラスに入る

「……で用事ってなんなんだ？」

「……Bクラス戦の途中どっか行ってたじゃないか。あれでどこ行
ってたのかなっと思ってるね」

「明久は俺を疑ってるのか？」

「そう意味じゃないんだよ。でもちよつと……」

「俺はお前たちを裏切ったりしない。その日何があつたかは明日教
えてやるよ」

明久は教師陣とのデートが待っているのものでそっちに行かせることに
そして俺は紫苑とともに帰っていた

「今日は勝って良かったね」

「まあ、俺が裏であんなに頑張ったんだ。勝たないわけがないだろ
う」

「やっぱり裏で何やしとったんだね」

「まあな、俺はAクラスの設備を手に入れるためだったらなんだっ
てするからな」

「へー、Aクラスの設備の為、な……ほんまにそうかしら？」

「ああ、ほんとだよ」

「だったらこれは何？」

「そ、それは……」

「詳しいことは明日、坂本もつれて聞かせてもらっわ」
「へいへい」

第九問（前書き）

若干キャラ崩壊した気が……

今回は真人のその頃の話です

ぶっちゃけこの話を除いても第十問は別に問題がないので見たくない方は見なくても大丈夫です

第九問

「さて、説明してもらおうか」

「いったい何をしていたの？」

「隠し事はダメですからね」

「分かった、分かった。説明するよ」

質問攻めにあっている俺

なぜこうなっているかと言うと少し時を遡ろう

それはBクラス戦が終わった翌日の朝だ

~~~~~

俺はいつも通り紫苑が家に来て起き紫苑がつくる朝食を食べ二人で学校へ向かっていた

その時はいつもと変わらず他愛のない話をしていた

そしてFクラスにつくと

雄二がいて普通に挨拶をして他愛のない話をしていたら

明久が教室に入ってきて

「あ、雄二もいるし真人あの時の説明してよ」

なんて叫んだら

「そういえば真人にはまだBクラス戦の時などの行動の説明をしてもらってなかったな」

「そつえば、その話をしてもらっ約束やったね」

と二人が俺にじりじりと近づいてきた

しかしよく考えたら恥ずかしいので

窓から逃げる事にしようと思って窓に向かったら

ムツツリー二に阻まれ

女子二名と秀吉もこっちに来て

いまに至るわけだ

~~~~~

「恥ずかしい話なんだが……」

「大丈夫、話して」

「恥ずかしい話かそれは余計気になるな」

雄二がニヤニヤしている

この野郎中身知ってやがるな

なんかムツツリー二は敵意むき出しだし

ムツツリー二も知っているのか

「まあ、しょうがない。で、何処から話したらいいんだ？」

「……じゃあBクラス戦の途中で出て行ったところから

「そこからね……了解」

~~~~~

事前の情報収集でCクラスが参戦準備をしていると言う事を聞いた俺は

圧勝だったBクラス戦線を放り出しCクラスへ

「Cクラスの代表はいますか？」

「私だけじゃないか？」

「ああ、男の趣味が最悪の代表を見に来たんだ」

「それはどーも」

「お前があれの彼女なのか……あんなのを選ぶなんて噂通りに趣味が悪いんだな」

「それは挑発ととっていいのかしら？」

俺の挑発に軽く乗るCクラス代表小山友香

「まあ挑発ととりたければとつても構わない。ただ俺はもつたいないなと思っっているだけだ」

「どういう事？」

「それはだな……その前に確認することがあるな」

少し考えてまた話を切り出す

「お前よくあんな小物についてるな。俺が女だったら絶対にあんな性悪の小物にはくつつかない」

「何が言いたいのか？」

「……気にせず聞いてくれ、根本のヤローはクズだ、クズで小物だ」  
「それぐらい分かってるわ」

「おいおい、そんな事いっていいのかよ、まあそれぐらいは誰もが知っている事だろう。そしてこれは俺が聞いた話なんだがお前賢いやつが好きなんだろう？」

これはFクラスが補充テストを受けている時に集めた情報の1つだ

「それが何？」

「否定しないって事はあってるんだろ、って言う事はお前はあの根

本が賢いと思ってるのか？」

「ええ、そうよ」

「でもお前付き合ってるが根本の事好きじゃないだろ」

「……」

「俺は人のしぐさを見てれば誰が誰に好意を示しているかはわかる。そして俺が見る限りお前は根本の事を好意的に思っていない」

「何が言いたいのか？」

「どうせお前はBクラスを攻める為までにアイツを油断させておくために付き合ってるんだろ？」

「……」

「そしてBクラスを潰したらアイツの事なんか捨てる気だろう？」

「……」

「まあ、根本を好きになる奴なんていないよな」

根本は最低のくそやろうだ

好きになる奴なんていないだろう

「で？あなたは何をしにきたの？」

「交渉だ」

「交渉？」

「Bクラスと共闘なんてせずにこっちに付け」

「こっち？」

「ああ、俺はFクラスのもんだ」

そういえば言っただけだな

こっちについてくれればいいのだけれど

「メリットは？」

「Bクラス代表の根本は人をコマとしか見ていない。どうせあんたのことだってコマの1つしか考えていないだろう。人の事をコマと

しか考えていない奴は人を信用しない。お前もいつか捨てられるだろう

それに今FクラスとBクラスが戦っている。俺達が勝っても負けてもBクラスの点数は減る」

「だったらあなたたちがもし勝ったら点数の減ったあなたたちを狙う事にするわ」

「普通はそうだろうしかし俺達の目標はAクラスだ。Bクラスとは設備の入れ替えはしないだろう」

「それで？」

「そうするとお前達は負けてボロボロのBクラスを潰せばBクラスの設備が手に入る。それに根本との仲も切れるし面白いものも見せてやれる」

説明や交渉は苦手だがここは長々と喋ってみる

「面白いもの？」

「それは俺達の味方になればわかる」

「どうということなの？」

よっしゃ食いついてきた

「まあ、言わせてもらえばアイツは単なる小物だ、雄二にはわから無いかもしれないが、俺はあんな小物とは何度か戦闘したことがあるから経験で分かる」

「経験？」

「そこは気にしないでくれ。とりあえずもうすぐ根本はここに来るだろう？」

「……」

「そして同じく不可侵を結ばうとする雄二に協定違反とでも言って攻撃を仕掛ける気だろう？」

「……」

無言だがこれはあっていると云う事だろう  
顔にだんだんと汗が見えてきた  
畳み掛ける

「しかしそんな事は簡単に予想できる。どうだ？あいつの小物さが  
分かったか？」

「ええ、一応ね……」

「それにアイツも健全な男子高校生だ……押し倒して……」

「それ以上言ったら殺すわよ」

「やっぱり根本が嫌いなんだな」

「もうまどろっこしいのはなしよ、そうよ、私は根本が嫌いよ、大  
っ嫌い。でも頭が切れるから付き合ってるの利用できそうだから！」

うわ……ぶっちゃけちゃったよ……

流石にやりすぎたか……

「その言葉を聴いて安心したお前も普通の女子高生なんだな」

「そうよ、誰が好き好んで付き合う物ですか。あんなぶ男」

「ハハハ、賢い女も好きだがそんなきっぱりした女も好きだぞ」

「話を戻すわ、交渉をしに来たんですたよね？」

「ああ、そうだ。返答はどうなんだ沈黙の了解はめんどくさい口で  
言ってくれ」

「あなたの事が気に入ったわ、名前は？」

「柊真人だ」

「柊真人ね、分かったはこれからよろしく頼むわよ、真人」

「了解、っと根本が来た……」

そついつてると奥の扉から根本が入ってきた

（それで私はどうしたらいいの？）

（作戦結構まで根本にいつも通り接してくれ）

（分かったわ）

そう言ったあと小山さんは根本のもとへ

そして数分後雄二たちが教室へはいつてきた  
するとまた小山さんが近づいてきて耳打ちしてくる

（どうすればいいのかしら？）

全部聞いてくるのね

まあそんな女もいいけどさ……

（とりあえずは根本の味方みたいな感じでお願い、その方が根本を  
油断させれるから）

（分かったわ）

デジャブな気がする

そして雄二にアイコンタクトで話しをし

雄二たちが教室から出た所で

俺も隠れるように教室から出た

ぶっちゃけ影薄いから気づかれないのだけれど

+ + + +

そして秀吉の時

「ごめんトイレ行ってくる」

そう言つて雄二たちと別れると一度二階に行き通行者に紛れCクラスへ

Cクラスに入ると小山さんがこっちに近づいてきた

「おはよう真人」

「ああおはよう小山さん」

「小山さんじゃなくて友香でいいわ」

「ああ、それで友香。いまからここに秀吉が来るからすごいヒステリックな感じでBクラスにも聞こえるように叫んでくれ」

「……それって私の評判悪くならないかしら？」

「大丈夫いくら評判が悪くなっても友香は友香だから、俺は好きだぞ」

「そ、そうなら……いいのだけれど」

「そのほうがBも油断して作戦もしやすくなる……秀吉が来た、お願いするな」

そして秀吉と言い争いをする友香

昨日もだが意外と演技がうまいもんだ

そして秀吉が去つていったらこっちに友香が戻ってくる

「どうだったかしら？真人」

「ああ、完璧だな、友香」

「そう……それならよかった」

『代表デレデレだな……』

『終つてあんなキャラだったっけ？』

『恋は盲目』

『柊の顔だつてそんなに悪くないんだから仕方ないんじゃないか？』

周りが騒がしいが気にしないでおこう

このキャラを作るのは結構大変なのだから

女子に対しては……基本ジェントルなのだから

それから少し会話していると時間もやばくなってきた

「すまない……もうすぐ再開だ」

「そう、それじゃあ頑張つてBクラスをボロボロにしてきて」

「了解、Bクラスの主力は潰しておくよ」

そういつて一般の通行人のフリをして一階に行きFクラス方面から

Bクラスへ行き

明久たちに合流した

~~~~~

「と言う事だ。皆わか……うお!!」

俺が言い終わる前に周りは他のクラスメイトに囲まれていた

『お前は俺達が戦つとる間になにしようんじやい』

『羨ましい』

『何してんだよ』

と口々に言いクラスメイトは上履きを投げってくる
最初は耐えていたが次第にうざくなってきたので
バックから木刀を出す

しかし……

「あんたね……まったくええ加減にしい昔から変わってへんのやから……」

……横の紫苑は俺のバックから刀を取り出していた

「うわぁ、タンマタンマ!!」

「お仕置きやで!」

紫苑は振り上げた刀を振りおろし……

そのままの勢いで刀を捨て、俺の口へ柔らかいものが当たる

「ほんまにもう……次したら承知せんからね……」

そう言った紫苑の顔は赤かった

「いまだ、畳み掛ける」

「へ?うわぁぁぁぁぁぁ!」

「さすがの真人もあれでは太刀打ちできんか……」

「紫苑ちゃん大胆です」

「紫苑……やるわね……」

「これぐらいで終わると思うなよ、次弾装填、懐にある暗器も奪え!」

「明久、ほどほどにしておけよ」

「もう何が何だかわかんねええ!!」

その日文学園ではとある男子生徒の叫び声が断たなかったと言う

第九問（後書き）

完璧作者の趣味で行かせてもらいました
まどろっこしいことは抜きです
どんどん行かせます

最後まで読んでくださいましたありがとうございます

第十問

問題（生物） 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『？脂質 ？炭水化物 ？たんぱく質 ？ビタミン ？ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

柊真人の答え

『？水 ？金 ？刀 ？社会科の授業 ？萌え』

教師のコメント

？が気になって仕方がありません

吉井明久の答え

『？砂糖 ？塩 ？水道水 ？雨水 ？湧き水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時

を原発性無月経といい……」

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

Bクラス戦が終わって二日後

俺達はこれで最後となるFクラスの中での作戦の説明を受けていた

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったのことだ。感謝している」

壇上に立った雄二が普段ともにいる俺が珍しく思っくらい素直に礼を言った

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

明久も同じように驚いている

「ああ。自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

雄二がそんな事を考えてるなんて意外だ

もっとひどい奴かと思っていたがこれは態度を変えてやらねばな

「ああ。ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突き付けるんだ!!」

別に俺はAクラスの設備が手に入りさえすればいいので
雄二の宣言などどうでもよかったのだが、Fクラスの生徒たちは歓
声を上げていた

『おおーっ!』

『そうだーっ!』

『勉強だけじゃないんだーっ!』

D、B戦で負けなしのFクラスだ
士気は限界まで高まっている

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決
着を付けたいと考えている」

主要メンバーは昨日のうちに全員聴いているのでさして驚いていな
いが、クラスの奴らは驚き教室中にざわめきが広がった

『どういう事だ?』

『誰と誰が一騎打ちするんだ?』

『それで本当に勝てるのか?』

「落ち着いてくれ、それを今から説明する」

雄二が机を叩き静まらせる

「やるのは当然、俺と翔子だ」

クラス間の戦争を代行するのだ戦うのが代表同士というのは当然だ

ろう

しかしそれには問題が出る。相手はあの霧島翔子だ。学年主席で点数は学年次席の姫路さんを圧倒している。点数の差は圧倒的だ。そんなことを考えていたら

「バカの雄二が勝てるわけ……」

雄二以上のバカが余計な事を言った

シュンツ！！（カッターが投げられた音）

「避けるっ！！」

キンツ！！（カッターを刀ではじく音）

「真人、お前結構できるな」

「これぐらい楽勝だ話を続けてくれ」

トスツ！！（カッターが畳みに刺さる音）

明久の方向に飛んできたカッターをはじくあぶねえ、もうちょつと遅れたら手に刺さる所だったな……

普通友達にカッターを投げるか？

「明久、さっきは真人に防がれたがもしまた同じことを言ったら」

「同じ事を言ったら？」

「次は耳だ」

明久は友達と思われてないらしい

「まあ、明久の言うとおり確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」

ならばなぜカッターを投げた

「だが、それはDクラス戦もBクラス戦も同じだったろう？まともにやりあえば俺達に勝ち目はなかった」

「俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。俺達の勝ち揺るがない」

今までFクラスを勝利に導いてきた雄二の言葉を疑うような奴はもうこの教室にはいない

「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を皆に見せてやる」

『『『おおーっ！』『』『』

確認するまでもなく全員雄二を信じているようだ

「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちはフィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ」

日本史……俺の得意科目か。しかし雄二の得意科目ではないし霧島さんが苦手な科目ではない。なぜこの科目なんだ？

「内容を限定する。レベルは小学生程度、方式は百点満点の上限あ

り、召喚獣勝負ではなく純粹な点数勝負だ」

なるほどそれならば満点前提の集中力の勝負になる
召喚獣の勝負よりは勝ち目がありそうだが……

「でも、同点だったら、きつと延長戦だよ？ そうしたら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

「確かに明久の言うとおりじゃ」

俺の言いたいことをうまく明久が代弁してくれる
喋らなくてもいいとは楽なもんだ

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？ いくらなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「??それなら、霧島さんの集中力を乱す方法を知ってるのか？」

「いいや。アイツなら集中してなくても、小学生レベルのテストなら何の問題もないだろう」

そりゃそうだろう

「雄二。あまりもつたいぶるでない。そろそろネタを明かしてもいいじゃろう？」

クラスの連中も秀吉の言葉に頷く。俺も考えてはいるが雄二が何をしたいかがさっぱりわからない

「俺がこのやり方採った理由は一つ。ある問題が出れば、アイツは必ず間違えると知っているからだ」

ある問題？

「その問題はー『大化の改新』」

大化の改新……それは645年にあった政治改革だ。正確には646年にあった何かだった気がするが小学校では645年と習ったのでそれで行こう。行った人物は中大兄皇子でつながりとしては蘇我氏を滅ぼした乙巳の変からつながってたんだっけな。大化が日本最初の年号だったことからこれもこれが日本と言う国の起源であると言う事もわかるかな政治的にはここから天皇主権の政治が復活した日本でもかなり大きな改革だ
こんな簡単な問題を学年主席が間違えるかな？

「大化の改新？誰が何をしたのか説明しろ、とか？そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」

「そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」

「単純というと——何年に起きた、とかかのう？」

「おっビンゴだ秀吉。お前の言うとおり、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ。」

そんな明久ですらわかるような基礎的な問題を霧島さんが間違えるのだろうか？

もし間違えるとしても雄二はなんでそんな事を知ってるんだ？

「大化の改新が起きたのは、645年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

「まあ常識だからな、いくら明久でも……」

そう言って明久の顔を見る。すると明久は顔を逸らしたうん、忘れよう

「だが、翔子は間違える。これは確実だ。そうしたら俺達の勝ち。晴れてこの教室ともおさらばだ」

「あの、坂本君」

「ん？なんだ姫路」

「霧島さんとはその……仲が良いんですか」

それは俺も疑問に思っていたことだ

先程から雄二が霧島さんの事をいう時は大分親しそだった
何かつながりがあるのは間違いないだろう

さてここで問題だ

女子に恵まれないFクラス、そしてオレの自己紹介の時なんて幼馴染と言っただけで襲いそうになった

そんな彼らが学年主席と仲がいい男子を許せると思いますか？

「ああ。アイツとは幼馴染だ」

答えはムリです

「総員、狙ええ！」

明久の号令でFクラスの男子が一斉に上履きを構える
速い、なんてスピードだ……

「なっ！？なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」

「黙れ男の敵！Aクラスの前に貴様を殺す！」

「俺が一体何をしたと！？」

ピンチの雄二を無視して俺は近くにいたクラスメイトに一言

「お前、今俺のコレクションに触ろうとしたか？」

「ひいい、す、すいません。坂本を抹殺するにはこれぐらいがいい
と思うて」

「もし触ったら殺す」

なかには俺のコレクションで雄二を抹殺しようとしてる奴までいる
のか

おかしいクラスだ

「遺言はそれだけか？……待つんだ須川君。靴下はまだ早い。それ
は押さえつけた後で口に押し込むんだ

「了解です隊長」

なんて奴らだ

しかし計画性のある犯行だ
そこだけは学んでおこう

「メモって無くて助ける！！」

雄二の叫び声が聞こえる

「あの、吉井君」

「ん？姫路さん。何？」

「吉井君が霧島さんが好みなんですか？」

「そりゃ、まあ、美人だし」

「……」

殺気！？まさか平和な学園で殺気を感じるとは……

発生源が気のせいかなFクラスの女子二名な気がするが
多分気のせいだろう

「え？なんで姫路さんは僕に向かって攻撃態勢を取るの！？それと美波、どうして君は僕に向かって教卓なんて危険な物を投げようとしているの！？」

気のせいじゃなかった

どうにかしなければ…… Aクラス戦の前にFクラスが壊滅してしまう

「まあまあ、落ち着くんじゃ皆の衆」

流石秀吉冷静な対応だ

俺もそれにのっかるう

「そうだ、皆落ち着こう」

「む。真人と秀吉は雄二が憎くないの？」

「俺には相手がいるから問題ない」

「それに冷静になって考えて見るがよい。相手はあの霧島じゃぞ？男である雄二に興味があるとはおもえんじやろうが」

そうだった秀吉の言うとおりだ。

「むしろ興味があるとすれば……」

全員の視線が姫路に集まる

「な、なんですか？もしかして私、何かしました？」

いや、姫路さんは特に何もしてない。ただ、霧島は女が好きで男が嫌いな同性愛者と言うだけだ

まあ俺は噂を信じるタイプではないから、そこまで深くは考えないが

「とにかく、俺と翔子は幼馴染で、小さな頃に間違えて嘘を教えてたんだ。」

「なんで間違えて教えてんだよ

「そこは気にするな……アイツは1度覚えた事は、決して忘れない。だから今、学年トップの座にいる。だが俺はそれを利用し、アイツに勝つ！ そうしたら俺達の机は……」

『『『システムデスクだ！』』』

+ + +

「一騎討ち」

「ああ？Fクラスは試召戦争として、Aクラスに一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。今回は代表の雄二を筆頭に、俺、明久、姫路さん、秀吉、ムツツリー二と首脳陣を揃えてAクラスに来ていた

「うーん」

「どうした？明久」

横で珍しく考え込んでいた明久に話しかける

「え？いや毎回こうしてたら僕の制服は繕いだらけにならなかったんじゃないかって……」

「ああ、確かにそうだな」

今更気づいたのかと思ったがそれは言わないでおく

「うーん、何が狙いの？」

雄二と交渉のテーブルについているのは秀吉の双子の姉の木下優子さん

外見は秀吉に瓜二つでとてもかわいい

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが警戒するのも当然だろう。下位クラスに位置する俺達が一騎打ちで学年トップの霧島さんに挑むこと自体が不自然なのだし何か裏あると考えているのだろう

「Fクラスとの面倒な試召戦争を手軽に終わらせる事が出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないわ」

「賢明だな」

ここまでは予想通り。ここからが本番だ

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……昨日来ていたあの……」

「ああ。アレが代表がやってるクラスだ。幸い宣戦布告はまだされていないようだ、さてさて。どうなることやら」

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間を取らない限り試召戦争はできないはずよね？」

これは試召戦争のルールの一つ。戦争に負けたクラスは三ヶ月の準備期間を経ないと、自分から宣戦布告できない。これは負けたクラスがすぐに再戦を申し込んで、戦争が泥沼化しない為の取り決めだ

「知ってるだろ？実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『和平交渉にて終結』ってことになっているってことを。規約にはなんの問題もない。……BクラスだけじゃなくDクラスもだ」

「……それは脅迫かしら？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

今の雄二の交渉の仕方は悪役にしか見えない

「うーん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね、その提案受けるよ」

「え？本当？」

会話に参加してない明久が声をあげる

「あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

昨日。根本は女子の制服を着て話をしにきたんだ。そのおかげで提案があっさり通るとは。流石雄二だしっかり考えているな

「でも、こちらから提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で先に三勝した方の勝ち、っていうのなら受けていいよ」

能天気そうできっちり警戒している

流石Aクラスだ

「なるほど。姫路や染色が出てくる可能性を警戒してるんだな？」

「多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんや染色さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないからし」

どうやら、この二人俺を忘れているようだ
そこまで俺の影は薄いか？

「安心してくれ。うちからは俺が出る」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みにはできないよ、これは競争じゃなくて戦争だからね」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い」

雄二はその条件をあっさりと呑む。俺等に勝ち目はあるのだろうか？

「ホント？嬉しいな」

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハ
ンデはあってもいいはずだ」

やはり、そういう交渉で来るか。科目選択さえできれば俺達が勝つ
確率がグンと上がるが一騎打ちの上科目まで選ばせると言うのは流
石に虫が良すぎるだろう

「え？うーん……」

黙り込んで悩む木下さん。クラスを代表しての交渉だ、安易な判断
は出来ないので慎重になるのは当然だろう

「……受けてもいい」

「うわっ！」

明久が情けない声を出す

「……雄二の提案を受けてもいい」

突然現れた静かなでも凜とした声をだした人物
Aクラスの代表の霧島翔子さんだ

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある」

「条件？」

「……うん」

霧島さんは頷いた後雄二を見た。そしてに姫路をゆっくりと観察し、再度雄二に顔を向けて言い放つ

「……負けたほうは何でも一つ言う事を聞く」

……やはり噂は本当だったのだろうか……

「……（カチャカチャ）」

「ムツツリー二、まだ撮影の準備は早いよ！というか、負ける気満々じゃないか！まさかこれも計算の内なのか？流石は学年代表だ。恐ろしい」

ダメだこりゃ。勝手に自爆してやがる

「なら、こうしましょう。勝負内容は五つの内お互い二つずつ決める。最初の一戦だけはランダムで決める」

木下さんが妥協案を出す

となりでは明久と姫路が小声で何か話してるがどうでもいいことなのでムシ

「交渉成立だな」

「ゆ、雄二！何を勝手に！まだ姫路さんが了承してないじゃないか」
「落ち着け、明久。お前は何を想像しているんだ！」
「心配すんな。姫路に迷惑はかけない」

自信満々の台詞。負ける気はしないと言う事が

「……勝負はいつ？」

「そうだな。十時からでもいいか？」

「……わかった」

「よし。交渉成立だ。一旦教室に戻るぞ」

「そうだな。クラスの奴らに報告するか」

交渉を終了し、Aクラスをあとにする

FクラスVS Aクラスの試召戦争の幕が上がる

第十一問

「では、両者共準備は良いですか？」

立会人はAクラス担任で学年主任の高橋女史が務める
しかしAクラスの設備はすごい

長らくFクラスにいた俺から見ると前回見たときよりもっとその
設備が輝いて見えた

さっさと終わらせてFクラスにさよならしたいな

「ああ」

「……問題ない」

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ！」

そう言っ出てきたのは秀吉の姉、木下優子だ
対するFクラスは……

「雄二、やらせてくれるか？」

「ああ、敵の出鼻を挫いて来い」

「了解」

そう言つて前に出る

「あれ？柊君居たんだ」

「いましたよ！！」

俺の影め……どこまで薄いんだ
まあそんなことはどうでもいい
作戦実行だ

俺は木下さんの横に行き耳打ちをする

（さて、貴方にひとつ相談です）

（一体何？悪巧み？）

（違います、単なる相談です）

（……言つてみて……）

（俺には得意科目があります。誰にも負けない自信のある得意科目が）

（そうね……忘れてたわ）

（そこなんですが……本来ならば俺の得意な社会科で倒そうと思つていたんですが、貴方には恩があります。その恩を今ここで返そうと思ひましてね）

（まさかアレのこと？貴方も律儀ね、それでどうやって返すつもり？）

（音楽です。歌唱力なら貴方が俺に負けることはないでしょう。テストに関しては俺に作戦があります。どうですか？）

（う……）

ついでに木下さんが歌が下手つてのは調査済みだ
雄二から勝つためには手段を選ばないと言われたので作戦を選んだ
ちゃんと事前に必要なものはそろえてある

これならば相手に悪い気持ちを与えず勝てるだろう

（柊君、悪いんだけど……それは遠慮しておくわ）

（そうですか……まさか唄が苦手なんですか？）

（え？……そんなことあるわけ無いじゃない）

（そうですね、優等生の木下さんが唄が歌えないわけないですもんね）

まあ歌えないのだが

しかしこの作戦が使えないのなら
作戦その二だ

（じゃあ木下さん、代表が言っていた事をこの勝負でも実戦しませんか？）

（代表が言っていたこと？）

（負けたほうが勝った方のいうことを聞く。というものです）

（え？そんなの、私が負けるに決まってるじゃ……）

（Aクラスの優等生さんがFクラスの生徒に戦う前から負ける気なんてないでしょう？）

相手が言葉を言い切る前に言葉を言い切る

「おい、二人で何をやってるんだ、さっさと始めろ」

「へいへい、では行きますよ」

雄二に催促され仕方なく召喚を始めようとする
そして始める前に一言

「木下さん、この勝負で負けたら勝った方の言うことを1つなんでも聞くというのはどうでしょう？」

「え？だからそれじゃ……」

「貴方はAクラスの中でも指折りの実力者なのですから俺に勝つくらい余裕ですよ？」

「そ、それは……」

「俺は最低のFクラスの生徒ですから、問題ないですね？」

「そりゃあOKだろ、相手はAクラスだぞ」

雄二も合いの手を入れる

これで相手は拒否できなくなった

「……分かったわよ、その条件でいいわ」

「ありがとうございます」

「勝った気になるんじゃないわよ」

これが周りの評価に流される人が

少し前まで俺もこうだったんだと思うと感慨深いものがあるな

さて……この条件の前でわざと負けるなんて俺には出来ない

実力の差を見せ付けてやる

「科目は世界史をお願いします」

「世界史！？柊君が最も得意とする科目じゃない！？」

「行きます！！」

『Fクラス 柊真人 世界史 488点』

VS

『Aクラス 木下優子 世界史 362点』

点数差は圧倒的

操作技術も俺のほうが上だろう

なんたって俺はあの日Bクラスのメンバーを蹂躪して行っただから

「さて、終わらせますか」

「まだ始まってすらないわよ、甘く見ないで」

そういつて木下さんの召喚獣が直進してきた

俺の召喚獣はそれを待ち構え居合い切りの構えを取る

「待ってましたよ」

「そう来るのはお見通しよ!」

そしてそのまま居合い切りをしようと思ったなら避けられた

流石Aクラス、動きが早い

俺の行動も分析しているのだろう

・・・が

「甘い!!」

「え!?!」

木下さんの召喚獣が吹っ飛ぶ

『木下優子 世界史 121点』

甘い、俺の召喚獣をそこらの召喚獣と一緒にしてもらったら困る

「さっきのどうしたの?」

「俺の召喚獣は腕輪もちですよ、そこらの召喚獣とは違っんです」

悔しそうにする木下さん

しかしこの能力を人前で使ったことは殆ど無い
知らなくて当然だ

「腕輪の能力ね……厄介だわ」

「あとはコレで終わりかな」

そして弱った木下さんの召喚獣に一閃
木下さんの召喚獣は0点となり戦士
俺の勝ちだ

「まず一勝!!」

そう言つてFクラスのところに行く

「すごいよ真人、流石だね」

「予想通りだ。よくやった真人」

「ま、これぐらい当然だよ」

これで役目は一応終わらせた
しかし俺にはまだ遣り残したことがある

「さて、木下さん、いや優子、こっちへ来てもらおうか」

「勝負に負けたのは私だから仕方ないわね」

ちゃんとした約束の結果だ
文句を言う人はいないだろう

「で、何をして欲しいの？」

「……ん、まあいずれ決める、決めたら行くよ」
「分かったわ」

俺はダメだ、いざと言う時に勇気がない
何の勇気かって？

後ろにいる鬼の形相をしている紫苑を無視して俺の要望を言うことだ
言ったら殺されるだろう……今のあいつなら殺りかねん

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。科目は物理でお願いします」

Aクラスから出たのは佐藤美穂さん

それなりの実力者だった気がする

Fクラスから出るのは

「頼んだぞ、明久」

「え？僕！？」

「じゃなくて紫苑っ！！」

すかさず雄二の言葉に付け加える

雄二め何を考えているんだ

「明久なんて出しても負けるだけだろ！！」

「いや、意外とやるかもしれんぞ」

「絶対負ける。それだけは確信できる」

「酷いよ、真人！！」

明久が突っ込みを入れる

俺は何かおかしいことを言ったか？

「たしかに明久はバカだが俺はあいつを信じてる」

「雄二、僕に本気を出せって言ってるのかな？」

「ああ。もう隠さなくていいだろう。この場の全員に、お前の本気を見せてやれ」

いかん、このままだと明久が出てしまう
俺は勝ちに来てるんだ

負ける素材はどうしても排除せねば

「なあ、明久？お前の本気ってなんだ？」

しかし友達をバカだと思い込むのも失礼なので
一応本気がどんなものか聞いて見る事に

「ああ、今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」

「まさか・・・・・・・・・・」

まさか・・・・・・・・・・隠しダネでもあるというのか

「そうさ。君の想像通りだよ今まで隠してたけど、実は僕――」

実は？

超天才とかか？もしくは能ある鷹は爪を隠すで実力を隠していたと
いうのか！？

何はともあれ明久へのイメージがこれで変わるな

いままでバカだと思っててごめんな、明久。お前は・・・・・・・・

「――左利きなんだ」

・・・・・・・・やっぱりバカだった

「紫苑、行つて来い」

「了解や」

「すまん、紫苑任せたぞ」

「このバカ！テストの点数に利き腕は関係にしようが！」

「み、美波！殴るのは勘弁して！」

後ろで二人がなにやらやっている

そこに雄二が近づき明久の肩を叩き、こう告げる

「予想通りだ」

流石だ雄二

お前は最早こんなことになるのは分かりきっていたと言うことが付き合いは同じくらいのはずなのに雄二は明久のことをよく見ているんだな

やはり雄二はすごい奴だ

「ちょっと雄二！アンタ僕をぜんぜん信賴してなかったでしょ！？」

「信賴？何ソレ？食えんの？」

雄二と明久のコントは無視して紫苑の戦いに集中しよう

なんせ相手はAクラスだ

自分から教科を指定したと言うことは得意科目と言うことだ

紫苑は物理は得意ではないしさてどうするか……

「よろしうね」

「あ、こちらこそ」

丁寧にお辞儀をする二人

Aクラスの子だし礼儀正しいのは普通だよな

『Fクラス 染色紫苑 物理 232点』

VS

『Aクラス 佐藤美穂 物理 389点』

まずい紫苑は調子が悪いようでもいつもより点が低い
対する相手は自身で選んだ科目だけあつて点が高い
しかし相手は腕輪を持っていない。勝てるか？

「高い点やね、まあやってみるわ」

そういつて紫苑の召喚獣が前に出る

「私の武器分かってます？」

「鉄球やろ、そのぐらい考えとるで」

相手の召喚獣が振ってきた鉄球を刀で受け流す

しかし点数の差でダメージを食らっている

流石に一度も戦闘をしていないのに自分より点が高い人を倒すには
無理があるか……………

「懐がから空きやで」

「なっ!？」

そのまま相手の召喚獣の懐へ走り出し、切りつける

……………が点数差で一撃では仕留められない

そして紫苑の召喚獣の真上に大きな影

「これでしまいか……………」

「ありがとうございます」

流石に無理だったか

紫苑がこっちに帰ってくる

「ごめん、無理やった」

「気に病むことはない、お前は十分頑張った」

「大丈夫だ、計画に狂いはない」

現在一勝一敗いい感じだ

第十二問

「では三人目の方どうぞ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・（スック）」

ムツツリーニが立ち上がる

科目選択権がここでも役立つ

なぜならムツツリーニは得意科目以外だったら明久の平均以下の点数しか取らないが得意科目の点数ならAクラスのそれを軽く凌駕するからである

そんなムツツリーニの唯一の得意科目は保健体育

「じゃあ、ボクが行こうかな？ 1年の終わりに転入してきた工藤愛子です、よろしくね」

Aクラスはショートでボーイッシュな女子が出てきた

「教科は何にしますか？」

「……………保健体育」

今その最強の武器が放たれる

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね」

工藤さんがムツツリー二に話しかける

転校生だからムツツリー二の実力を知らないのかえらく余裕だ

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ …… キミと違って、実技でね」

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ もちろん実技で」

「フツ。望むところ——」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

永遠とはこの二人は何を言ってるんだか……………

「だったらその柊君はどうか？」

予想通り俺にも指名が

「まあ、そっちが構わないなら……………」

「じゃあ言っちゃうけどいい？」

「…………… そっちがそこまで経験豊富じゃないと思うんだが…

「・・・」

「へ！？い、いきなり何をいつてるの！？」

「いや、勘だが・・・・・・・・そのなんか・・・・・・・・・・..
忘れて」

「僕は経験豊富だよ！！」

「いや、忘れて・・・・・・・・お願い・・・・・・・・」

「忘れられないよ、こんな屈辱初めてだよ」

「ごめん・・・・・・・・」

「今から見せてあげようか？」

「遠慮します」

「んっ、こうなったら・・・エイッ！！」

ピラッ！！

「すみません、勘弁してください」

「仕方ないな・・・・・・・・」

やばい、喋りすぎた

これは後ろにいるお方が黙ってなさそうだ

「大丈夫かいな、土屋？」

「・・・・・・・・気にするな・・・・・・・・」

何故だろう、床が真っ赤だ

何があったというんだ？

「無理しなくていいんだよムツツリー」

何があつたんだ？

よく見れば赤い液体が・・・・・・・・これ血だ

まさか……………

「大丈夫か、ムツツリー二!？」

「だめだ真人、ムツツリー二の鼻血が止まらない!」

は？鼻血？どうして鼻血？

この出血量はどう見ても鼻血じゃないだろ

「どういうことだ明久、説明してくれ」

「え」とさつき二人で話していたでしょ、そしたらムツツリー二がいきなり鼻血を出して倒れたんだ。その出血量が多くて多くて……」

「状況は理解した。…………坂本、ここは棄権でいいよな？」

「ああ、ムツツリー二がこの状態じゃあ仕方がない」

「…………まで、行ける」

「大丈夫か？だったら召喚だけでもしてもらうか……………」

こんな弱りきったムツツリー二に戦ってもらうのは無理かもしれないが一応召喚してもらう

「…………サモン」

「こっちも試獣^{サモン}召喚っ」と

ムツツリー二の召喚獣は小太刀の二刀流

一方工藤さんは巨大な斧を持っている

「バイバイ、ムツツリー二くん」

そういつて工藤さんの召喚獣が突進してくる

そして斧が召喚獣を真っ二つにしそうになったところで

ムツツリーニが1つの単語をつぶやく

「・・・・・・・・加速」

その瞬間ムツツリーニの腕輪が光り、彼の召喚獣の姿がブレる
そして気がついたら相手の真後ろに

普通ならここできりつけるところだがここでムツツリーニがダウン
ここで終了だ

『Fクラス 土屋康太 保健体育572点』

VS

『Aクラス 工藤愛子 保健体育446点』

すごい、最早この学校でムツツリーニに保健体育で勝てる奴はいない
だろう

「Bクラス戦のときは出来がイマイチだったらしいからな」

雄二が説明する。ムツツリーニめむつつりの名は伊達じゃないって
事か

「そ、そんな……！ この、ボクが……！」

かったはずの工藤さんが床に倒れこむ

「これで二対一ですね。次の方は？」

高橋女史はさして気にした風も無く続ける

「あ、は、はいっ。私です」

Fクラスから出たのは姫路さん
Fクラスの最大戦力でエースだ

「それなら僕が相手をしよう」

Aクラスから出てきたのは久保利光

「やはり来たか、学年次席」

久保は学年三位の実力の持ち主だ
それが姫路さんが振り分け試験を途中退席したので学年次席の座に
ついている
そしてつくわえるとすれば明久に興味を抱いている危ない人物でもある

「ここが一番の心配どころだ」

久保の実力は姫路さんとはほぼ互角。総合点だと20点ぐらいしか差
がない
場合によっては負ける事だつてある

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします」

高橋女史が二人に尋ねるとすぐに久保が答えた。

「ちよつと待った！何を勝手にー」

「構いません」

「姫路さん？」

明久がクレームをつけようとしたら姫路さんが止めた

「それでは……」

『Fクラス 姫路瑞希 総合科目4409点』

VS

『Aクラス 久保利光 総合科目3997点』

『ま、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

いたるところから驚きの声上がる

点数差が400オーバーだなんて久保の点は十分高いのにその点が霞む位すごい点数だ

流石姫路さん！

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ？」

「……私、このクラスみんなが好きなんです。人の為に一生懸命な皆の居る、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

Fクラスが好きだなんて言ってくれるじゃないか姫路さん

「これで二対二です」

高橋女史の表情に焦りが見える

「最後の一人、どうぞ」

「…はい」

Aクラス最強で最後の敵、霧島さん

そしてFクラスからは当然

「俺の出番だな」

雄二しかない

「教科は何にしますか？」

Aクラスの生徒はなんら騒いだりはしない

なぜなら霧島さんは学年主席普通の勝負じゃ負けるわけはないからだ
そう普通の勝負では、しかし我々が代表は普通の勝負など挑んだり
はしない

「教科は日本史、内容は小学生レベルで百点満点方式だ」

雄二の宣言でAクラスにざわめきが生まれる

『上限ありだつて？』

『しかも小学生レベル、万点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

「わかりました。そうなると問題を用意する必要しなくてはいけませんね。少しこのまま待っていてください」

ノートパソコンを閉じ高橋女史が教室を出て行き、俺たちは雄二に
近づく

「雄二、あとは任せたよ」

「へまするなよ」

「ああ、任された」

お互いの手を握り合う

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久の事か。気にするな。あとは頑張れよ」

明久のこと？ 一体なんだろう？ 試召戦争を始めた理由だろうか？

「はいっ」

「では、最後の勝負、日本史を行います。霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

「……はい」

「じゃ、行ってくるか」

返事をし代表二人は教室を出て行った

「皆さんはここでモニターを見て下さい」

高橋女史が機械を操作すると、壁のディスプレイに視聴覚室の様子が映し出された

「では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です」
「不正行為などは即失格になります。良いですね？」

「……はい」

「わかっているさ」

「では、始めてください」

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

小学生レベルとだけあって出てくる問題は簡単だ

（ ）年 鎌倉幕府

（ ）年 大化の改新

「あ……」

「よ、吉井君っ」

「やったな」

「うん」

「これで、私たち……」

「僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

Fクラスの声がそろっ

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおおっ！』

教室を揺るがすような歓喜の声

日本史勝負 限定テスト 100点満点

Aクラス 霧島翔子 97点

VS

Fクラス 坂本雄二 53点

Fクラスの卓袱台がみかん箱になった

第十三問

「三対二でAクラスの勝利です」

視聴覚室になだれこんだ俺達に対する高橋女史の締め言葉分かってます。誰もが理解しています。負けて事ぐらい

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく雄二に霧島さんが歩み寄る

「……殺せ」

「良い覚悟だ、殺してやる！歯を食い縛れ！」

「さて、殺すなら俺にやらせろ、地獄を見せてやる！」

「吉井君、落ち着いてください」

「大体、53点って何だよ！ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと——」

「いかにも俺の全力だ」

「この阿呆がぁーっ！」

今まで雄二のことを頭がいい奴だと思っていた俺がバカだった
こいつも明久と同じバカだった

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしょうが！」

「それについては否定しない！」

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「マサも落ち着いて！あんたやつたら・・・・・・・・・・と
るかもしれんね・・・・・・・・100点」

「当然だ！！だから俺に殺らせてくれ！！」

「ほんでもあかんよ！」

「くっ！三人ともなぜ止めるんだ！この馬鹿には喉笛を引き裂くと
言う体罰が必要なのに！」

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

「ダメだ明久、こいつは俺のコレクションの試し切りに使わせても
らう」

「待つてマサ！そら明らかに処刑やで！」

体を張ってとめられる

仕方がないので俺も明久も引き下がることに

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断してい
なければ、負けていた」

「言い訳はしねえ」

こいつ手を抜いていたのか
間抜けな野郎だ

「……ところで、約束」

「……………！（カチャカチャカチャ！）」

早い！！流石ムツリーニだ

明久も動き出してる、なんて奴らだ……………

「わかつている。何でも言え」

潔い雄二の返事。しかし全然かつこよくない

「……………それじゃー」

霧島さんが姫路さんに一度視線を送り、再び雄二に戻る

「……………雄二、私と付き合って」

は？

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……………私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……………私には、雄二しかない。他の人なんて興味ない」

なるほど、二人の会話を効いて理解した

要するに噂はガセで霧島さんは一途に雄二を想っていて姫路さんを見ていたのは雄二の近くにいる異性が気になったからなのか

「拒否権は？」

「……………ない。約束だから。今からデートに行く

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことにー」

霧島さんが雄二の首根っこを掴む

「ちょっと待て」

がそれを止める

「・・・・・・なに？」

「いや、野暮用だ。雄二」

「なんだ？真人助けてくれるのか、ありがとう」

「明日を楽しみにしてろ」

「なっ！？」

「あと霧島さん、雄二が変な事をしたら何時でも言ってくれすぐ駆けつける」

「・・・・・・ありがとう。でも雄二なら何しても良い」

「・・・・・・雄二、明日を楽しみにしてろ。それじゃ逝ってらっしゃい」

「さて漢字が違ったぞ！！」

「・・・・・・雄二、

霧島さんは雄二の首根っこを掴みなおしそのまま二人は教室を出て行った

「.....」

「.....」

「.....」

教室にはしる沈黙

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ」

が野太い声で破られる

この声どこかで聞いたような？

「ゲッ・・・・・・」

「いまゲッと言わなかったか？」

「言ってますんよ。空耳じゃないですか？」

「そうか、それならいいんだが」

「それで僕達に何か御用でしょうか？」

「ああ。今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな」

我がFクラス？

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生からこの俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『なにいつ！？』

クラスの男子全員が悲鳴を上げる

鉄人は鬼と呼ばれるほど厳しい教師だ

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、いくら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、ないがしろにしている物じゃない」

相手が言っているのは正論なので反論が出来ない

「吉井と坂本は特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の“観察処分者”と“A級戦犯”だからな」

「そうはいきませんよ！ 何としても監視の目を掻い潜って、今まで通り楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「……お前には、悔い改めるといふ発想はないのか？」

彼らには、その気は一切なかった。

というのは、ポーズだけだが。

「とりあえず明日から、授業とは別に補習の時間を2時間設けてやるっ」

「うえっ！？補習？……めんどくさいな……明久はどうだ？」

「そうだね……。また3ヶ月後に鉄人の魔の手から逃れるって目標が出来たから、やってみようかな」

「やる気が出たのはうれしいが、もうちょっとマシな理由はなかったのか？」

「ありません！」

そういつた鉄人の顔は呆れていた

しかしビツクリだ、その程度のことでも明久が勉強する気になるなんてこれは何かよからぬことが待っているのでは？

「さあ〜て、アキ。補習は明日からみたいだし、今日は約束どおりクレープでも食べに行きましょうか？」

「え？それは週末って話じゃ……」

「だ、ダメです！吉井君は私と映画を見に行くんです

「ええっ？ 姫路さん、それは話題にすら上がってないよ！？」

姫路さんと美波が、明久に詰め寄る

この人たちは明久のことは考えていないのか？

そんな事をしたら明久の主食が公園の水になることぐらい分かりきっているだろうに

「ちよっ、待て！ あんな事言われた上にこれ以上の罰なんて、理不尽にも程がある！！」

「西村先生、やっぱり補習今からやりましょう！思い立ったが仏滅ですよ！」

「吉日だ、バカ」

「そんなことどうでもいいですから！」

「まあお前たちがやる気なのはうれしいが――」

言葉を区切り姫路さんと島田さんと明久を見る鉄人

「無理をする事はない。今日だけは存分に遊ぶがいい」

ニヤニヤしながら言い放つ鉄人

どう考えても事情を理解してもてあそんでる

「おのれ鉄人！ 僕が苦境にあると知った上での狼藉だな！？ こうなったら卒業式には、伝説の木の下で釘バットをもって貴様を待つ――！」

「斬新な告白だな、おい」

鉄人に詰め寄ろうとしたところを、明久は美波に、ネクタイをつかまれ引つ張られる

「アキ！こんな時だけやる気を見せて逃げようったって、そうはいかないからね」

「吉井君！その前に私と映画ですっ！」

そこに姫路さんも加わって明久を引つ張り合う

「ちょっと待って姫路さん！ なんで雄二じゃなくて僕となの！？」
「坂本君？ 何のことですか？」

「え！？違うの？じゃあ一体誰のことが・・・・・・・・」

「アキ！いいから来なさい！」

「あがあっ！美波、首は致命傷になるから優しく――」

「ホラ早くクレープ食べに行くわよ！」

「わ、私と映画に行くんですよね！」

「いやああっ！生活費が！僕の栄養があっ！」

明久、死ぬなよ

P L L L L L L L L

電話か・・・・・・・・相手は・・・・・・・・

「俺だ」

『ゴミ掃除終わったわよ』

「そうか・・・・・・・・分かった」

プツ

見に行くか・・・・・・・・

「西村先生以上ですか？」

「ああ、どうした惨なにか用事か？」

「いや、俺達が補習を受ける必要があるのかな・・・・・・・・と」

「まあ、いいじゃないか。コレもひとつの経験と考えて頑張れ」

「・・・・・・・・まあ一応やってみます。では話は以上なんですネ？」

「ああ、終わりだ」

それを聞くと俺は鉄人から離れ紫苑の元に

「おい、紫苑」

「え？どうしたの？」

「面白いものを見せてやる、付き合え」

「分かった」

そうして俺達はBクラスへ向かった

「おっとこれはおもしろい場面に出くわしたもんだ」

目の前には床に手を突き倒れこんでいる根本
そしてその前にはCクラス代表有香

「お前は柊！？」

驚いたようにこっちを見る根本

「おお、根本君。これはどうしたのかな？」

「お前には関係の無いことだ」

「面白いものってコレのことかいな」

「は？」

「ああ、恋人と勝手に勘違いして油断してたらその恋人に試召戦争
を仕掛けられて無様に負けるといふ面白い人間だろ」

「たしかに勘違いは怖いね」

「勘違いするな俺と友香は本当に付き合ってるぞ！」

おお、勘違いだ

そうか、こいつはまだ気付いてないのか本当に鈍い奴だ

付き合ってたくせに知らないのか、有香が好きなのは頭がいい奴だ
って事に

「貴方こそなに言ってるの？私と貴方は付き合ってたじゃない」
「まったく根本君は妄想が激しいんだな」

ここで止めを打つとかないな
またFクラスの邪魔をしてきたらたまったもんじゃない

「Bクラスの皆さんも大変だよな、根本の妄想に惑わされて」
「なっ！？」

「友香も根本にうっとおしく付きまとわれて大変だったんだろ」
「はっ！？」

うゝん、後一押しか

「こんな勘違いやろうを代表にしていたらBクラスは後々Dクラス
にもやられるんじゃないか？」

「いや、俺は・・・・・・・・」

ざわざわ

Bクラスがざわつきだす

今の連敗でつかれきってるBクラスは精神的にもまいっている
まともな判断は無理だろう

これでBクラスのまともりが無くなったらFクラスの安泰が近づく
だろう

「今は設備を入れ替えるところかな、大変ですね代表が根本のせい

で負けて」

近くのBクラス生徒に話しかける

「まったくですよ、Fに負けるしCにも負ける。泣きつ面に鉢です」
「もう根本なんて信じない方がいいんじゃないんですか、負けたのも根本のせいでしょう」

「そうですね、その方がいいかもしれません」

ふむ、いい感じにまとまりがなくなってきた
これで俺の任務は終了かな

友香がこっちに近づいてくる

「それで貴方のところはどつだったの？」

「ああ、俺もところ？負けたよ」

「あら負けちゃったの」

「まあな、最初から分かっていた勘はあるが……………」

「敗因は？」

「代表がバカ」

俺は即答してやった

友香は頭がいい男につく

さてここでどんな反応を示すのか……………

「ま、想定内ね」

「そうだろうよ、でお前は誰につく気だ？」

「私？私は貴方につくわよ」

「そつか……………何故だ？」

意外だ、まさか俺が選ばれるなんて

「貴方のおかげでBクラスに勝てたようなものだしね」
「・・・・・・・・あれか？」

多分アレだろう・・・・・・・・

「あれ？」

「紫苑、アレだよ。あの蹂躪」

「ああ、アレね」

「だからね・・・・・・・・あなたが私の頼みを聴いてくれたのかな？」

「まあ、頼まれたからな」

「あんたら仲ええん？」

「ん？見る限りだ」

「好きに見てくれたらいいわ」

紫苑は睨むような目つきで友香を見る
おいおい怖いぞ

「じゃ俺達はここで」

「ちよつと待って、こっちに来て」

「ん？なんだ」

そういわれ二人で廊下に出る

（あの子はなに？）

（お前は知らなかったか、紫苑だ）

（紫苑ってあの紫苑？）

（まあどの紫苑かしらんか、染色紫苑だ）

（染色ね・・・・・・・・あのAクラスの中でもトップクラスの実力者・

・・・)

(どうした？ なにかあったか？)

紫苑が頭がいいのは知っていたがAクラスでもトップクラスか
ビックリだ

(いえ、なんでもないわ。ところで貴方は頭がいい女が好きなの？)

(まあ、バカよりかはな)

(そう、分かったわ)

(でも俺はお前の頭が悪かったて好きだぞ)

(え？、そ、そう・・・)

やっぱり頭より大事なのは中身だよな

(あ、そうだ。お前にはすまないがヒステリックな女を演じてくれ)

(それに意味はあるのかしら？)

(んゝその方が動きやすいんだ、こっちが)

(まあ、いいけれど)

(すまないな、話は以上か？)

(そうね、時間かけたわね)

(問題ない)

そういつてBクラスの教室に戻る

「じゃお邪魔したな」

「ああ、邪魔だった柊。この借りはいつか返す」

「はあ、できれば返さないで欲しいな」

こいつ、まだ挫けないのか
すごい精神だ

「帰るぞ紫苑」

「そうやね」

そして二人で教室を出て行き

下校

下校途中

「それにしてもマサ最近お姉さんに似てきてない？」

「うーんたしかにそんな気がする」

「せっかく離れたのに何でやろうね」

「うーんこれが血なのか・・・」

これ以上あの姉貴には似たくない
でも本性を隠したままだとメンドイし
どうしたものか

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7893r/>

バカとテストと召喚獣 Fクラスの優等生

2011年5月18日01時05分発行